

---

# 魔法少女 えみやマギカ

赤い人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女 えみやマギカ

### 【Nコード】

N8225S

### 【作者名】

赤い人

### 【あらすじ】

FateのUBWエンド後のアーチャーが、なぜか並行世界のかつての自分（女）へと転生。まどかマギカ世界で、天秤の守護者は何を成すのか。

彼岸花さんが、志保のイラストを書いてくださいました！

<http://3217.mitemin.net/i25378/>  
いいイラスト、ありがとうございます！

## 第一章 疑惑の転校生 (前書き)

流魂記シリーズも書いてるのに、また書き始めてしまったし……  
……すいません。

原作とセリフがほとんど変わってない………進行につれてズレを作るつもりだけど、大丈夫だろうか。

## 第一章 疑惑の転校生

「アーチャー……！！」

すでにその様な力もないだろうに、息を乱して駆けてくる凜。

その姿を私はただ黙って見守る。

どうにか私の元までたどり着いた彼女は、息を切らせたまま私を見上げる。

「アー、チャー」

呼吸も苦しいだろうに、私の事を呼ぶ彼女。

ふと見れば、かつてのように地平線から黄金の日が昇ってきている。

かつてのセイバーも、今の私と同じような気持ちを持っていたのだろうかと思う。

そうは思っても、話すべきことはほとんどないので、いつものように言葉を発するしかない。

「残念だったな。そう言う訳だ、今回の聖杯は諦める凜」

「」

私の言葉に息を飲む彼女。

感極まっている彼女を見守り、次の言葉を待つ。

「アーチャー」

再び呼ばれるが、そのあとに言葉は繋がらない……やれやれ、いつも通りの彼女だな。

彼女は、いつもここ一番、何よりも大切な時に機転を失ってしま  
う。

「く」

いつでも変わる事の無い彼女に、私は笑みを漏らす。

まったく、普段はあまりに器用すぎると言うのに。

「な、なによ。こんな時だったのに、笑うこと無いじゃない  
っ」

「いや、失礼。君の姿があんまりにアレなものでね。お互い、よ  
くもここまでボロボロになったと呆れたのだ」

上目に睨めつけてくる彼女に、笑みを残したまま軽口を返す。

彼女は一度息をのみ、こんな事を言い出す。

「アーチャー。もう一度私と契約して」

まったく、なんて事を言うのだ……一瞬、誘惑に負けそうになったではないか。

だから、私はこう返すしかない。

「それは出来ない。凜がセイバーと契約を続けるのかは知らないが、私にその権利は無いだろう」

私はすでに敗退したサーヴァントで、君を裏切った男なのだから。

「それに、もう目的がない。私の戦いはここで終わりだ」

あの小僧……いや、衛宮 士郎に私は負けたのだから。

戦う以前なら忌々しい事実であったのだろうが、今ではむしろそうなる事が必然であったと簡単に思える。

「……けど、けど、それじゃ。あんたはいつまでたっても」

泣きそうな顔で言う彼女に、どうしたものかと思う。

いい加減分かってもらいだろうに、今も昔も女性の扱いが下手なのは変わらない。

「まいったな。この世に未練はないが」

どうやって泣かないで貰えるだろうか。

彼女に泣かれるのは……非常に困る。

私にとって彼女は、現実主義者だと言つのにいつだって前向きで  
とことん甘い。

そうでなくては張り合いが無いし、その姿に励まされてきた私と  
しては、最後までいつも通りの彼女であつてほしい。

「 凜」

ほしいのだが……急に良い台詞が浮かぶ訳でもなく、私  
の口からはただ彼女の名前が零れるだけ。

俯いていた彼女が顔を上げ、その涙を堪える顔を私に見せる。

その可愛さに未練が湧くが、伝えるべき事を伝えることで振りき  
る事にする。

少し離れたところでだらしなく倒れている衛宮 士郎へ視線を向  
け、その馬鹿の事を凜に託す。

「私を頼む。知つての通り頼りない奴だからな 君が、支えて  
やってくれ」

彼女が最後まで付いていてくれれば、私のような大馬鹿にはなら  
んかもしれないな。

「 アー、チャー」

たとえそうなくても、私は守護者のままだろうが……別  
にそれでもいい。

あいつの脆い刀身は鍛え直してやった、後は凜が居れば問題は無いだろう。

もう私に救いは無い、その事実を理解しているからこそ彼女は笑みを返してくれる。

「うん、わかってる。私、頑張るから。アンタみたいに捻くれた奴にならないように頑張るから。きつと、アイツが自分を好きになれるように頑張るから……！ だからあんたも」

今からでも、自分を許してあげなさい。

言葉にはされなかつたその言葉、救いは無いと思つてはいたが、そんなものは彼女には関係なかつたらしい。

ああ、わずかな間とはいえ彼女と共に在れたことは、誇りの無い私の唯一の誇りだ。

そんな彼女を心配させ続けるのは宜しくない……だから、私はもう大丈夫だと告げる。

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂。オレも、これから頑張っていくから」

ほのかに笑つた彼女の顔を最後に、私はこの世から去つた。

「く……………」

欠伸を噛み殺し、私は起き上る。

心地よい温もりを残すベッドから降り、部屋を出る。

洗面所で顔を洗い、丁寧に髪を整える。

以前は適当に行っていたのだが、友人にきつく言われて以来、しっかりと手入れすることになっている。

紅と言うよりは橙に近い色の赤毛を丁寧に梳き、整える。

鏡に映るのは、首にかかる程度の赤毛と鷹のような鈍色の瞳を持った長身の少女だ。

『えみや衛宮 しほ志保』

かつて英霊エミヤと呼ばれた男のなれの果て……………何故か生まれ変わった並行世界の衛宮 士郎（女）である。

部屋に戻り、制服に着替えてから台所へと向かう。

「いただきます」

朝食を作り、一人で食べる……………家族はもういない。

生まれの親は事故で死に、私を引き取ってくれたこの世界の切嗣

も病で死んだ。

仕方が無いこととはいえ、もう少しでも自分にできることは無かったのかと思ってしまう。

器用な生き方なら背負う事も無いのだろうが、あいにく不器用な生き方しかできないのが私だ。

「ごちそうさま」

食器を片づけ、弁当を鞆に入れ家を出る。

今日はいい天気である。

衛宮 士郎であったころよりも近未来的なこの街、見滝原は小奇麗で日差しがよく映える。

学校近くの小川が横を流れる並木道までたどり着き、いつも通りのポジションに留まる。

いつもここで留まるが、木々を揺らす柔らかい風と日差しはとても心地よい。

14年ほどこの平和な世界で過ごしたおかげか、少しは安寧を享受できるようになった。

「志保さん、おはようございます」

「ああ、おはよう仁美」

柔らかい雰囲気を持った少女が私に挨拶をしてきて、私もそれに  
応える。

『志筑 仁美』

見た目と雰囲気通りのいいところのお嬢様で、女性生活が分ならず  
孤立していた私に声をかけてくれた友人たちの一人である。

仁美と挨拶をしたと思ったら、すぐに見知った人影がやってくる。

「おっはよー！ やっぱ、志保に仁美は早いねー」

「おはようございます。私も今来たばかりですわ」

「おはようさやか。私も君より5分早い程度だよ」

『美樹 さやか』

元気印のお調子娘、彼女を言い表すのならこれが適切な表現だろ  
う。

この性格から、彼女が私に声をかけようとしたと思えるが違う。

私に声をかけようと彼女たちに提案したのは、私のもう一人の友  
人。

「ふふっ」

「んんっ」

「お」

三人同時に、最後の友人が駆けてくるのに気が付く。

『かなめ鹿目 まどか』

髪を二つに縛った、心優しい少女だ。

「おっはよー！」

「おはようまどか」

「おはようございます」

「まどかおそーい……………お、可愛いリボン」

どこかいつもと違うと思ったら、赤いリボンを使って髪を飾っている。

「そ、そうかな……………派手すぎない？」

「とても素敵ですわ」

「ああ、良く似合っているな。それに、派手と言うよりはお洒落だな」

私たちの言葉に、まどかは照れ臭そうに微笑んだ。

「でね……ラブレターでなくて、じかに告白できるように  
でなければ駄目だって」

「相変わらずまどかのママはかっこいいなあ……美人だ  
し、バリキャリアだし」

確かにまどかママはかっこいいな。

物事を受動的に受け止めるでなく、自分から取り組んでやりたい  
ことへと昇華させているの姿が華々しい。

「そういつぶりにきっぱり割り切れたらいいんだけど……」

「羨ましい悩みだねえー」

だが、華々しく映るということは、それが出来ないからであって  
……おっとりとした仁美には難しいだろうな。

「ま、どこかの誰かさんは、直接告白されてもきっぱり振っちゃ  
います」

「私みたいな男女と付き合ってもなにもいい事は無いさ」

何故か、私も仁美と同じように多数の告白を受けののだが

「それに、女性から告白されて、どう答えるというのだね君は」

女性からも告白されるというのはどうということだろうか？

男に告白されても困るのだが、一応今の性別は女なので余計困る。

「あはは………。それは、あえて受けて見る………  
とか？ あいた!？」

馬鹿な事を言ったさやかに拳骨を落とす。

「あー、頑張った？ 志保ちゃん」

「えーと、ファイトですわ？ 志保さん」

「はあ………。なんでこうなったんだ？」

なんだかもう、今朝の夢の余韻が台無しである。

「目玉焼きとは、半熟ですか？ それとも、堅焼きですか？ は  
い、中沢君!」

いつものように、ホームルームが担任の教師的にいいのかという  
発言から始まる………無茶ぶりされた中沢君、ご愁傷様だ。

あ、また指示棒折った………あれは学校の備品だろうに。

「はい、後それから、今日は皆さんに転校生を紹介します」

「そつちが後回しかよっ」

さやかが言ったように、順序がおかしいだろうに。

「じゃ、暁美さん、いらっしやい」

綺麗な姿勢で教室に入ってきたのは、綺麗な黒髪の少女だ。

「えっ………嘘、まさか」

まどかが妙な反応をしていたが、私としては転校生に嫌な感覚を思い出していた。

これは………硝煙の匂いだ。

かつて嫌というほど嗅いだ匂いを漂わせる少女。

その全てを俯瞰するような瞳にも覚えがある………昔の私のようにどこか諦めたものの目だ。

「はい、それじゃあ、自己紹介行ってみよう」

「暁美 ほむらです、よろしくお願ひします」

『暁美<sup>あけみ</sup> ほむら』

最低限の挨拶だけで終わったことで、ホワイトボードに名前を書いていた先生の手が止まる。

困惑した先生を置いたまま、暁美は自分で残りを書き終えて一礼

した。

暁美の視線が動き、その視線がまどかを捉えて……同時に捉えた私を見て驚愕したように眼を見開く。

「暁美 ほむら……何者だ？」

「志保ちゃん？」

私と暁美、互いに鋭い視線を向け合うのだった。

「不思議な雰囲気な人ですね、暁美さん」

「まあ、あまりかかわり合いにならない方がいいと思う」

「し、志保ちゃん？」

いかな理由があれど、硝煙の香りのする少女に普通の少女であるまどか達を近寄せるのは好ましくは無い。

「知り合いなの志保？ さっきもガンつけ合ってたように見えたけど」

「知り合いではないのだが……ああ、何と言ったらよいものか。とりあえず、彼女と接触する際は私も一緒に居た方が好ましい」

「志保さんが守る必要がありそうな方なのですか……分

かりました、その時はお願いしますね」

私はこの身になっても鍛錬は怠っていない。

まだ体の問題で衛宮 士郎の高校時代よりマシな程度だが、そこいらの成人男性数人程度なら引けを取らない。

以前通り魔を撃退したことで、彼女たちもその事を知っている。

「ごめんなさい。なんだか緊張しすぎたみたいで、ちょっと気分が………。保健室に行かせてもらえるかしら？」

暁美がそう言うと、周囲を囲んでいたクラスメイト達が連れていくと言っただが

「いえ、お構いなく。係りの人をお願いしますから」

このようにそれを断り、迷いの無い足取りでまどかの元へと歩いてくる。

「鹿目 まどかさん、貴方がこのクラスの保健係りよね」

やはり彼女はまどかの知り合いか？

思えば、まどかも最初に彼女を見た時に妙な反応をしていたな。

「え、えつと……あの」

「連れて行ってもらえる……保健室」

だが、知り合いにしてはまどかの反応もおかしい……………どういうことだ？

「まどか、私も付き合おう」

「う、うん。あ、曉美さん、その……………ついてきて

まどかと共に私も歩き出し、そのあとに曉美がついてくる。

黙々と歩く私と曉美に、まどかが後ろから付いてくる。

「あ、あの……………志保ちゃん？ 曉美さん？」

「……………」

「……………ほむらでいいわ」

何故曉美は、まどかに案内を頼みながら先行しているのか……………  
・おそらく、何かしらの用事がまどかにあるからだろう。

よし……………丁度、人通りのない渡り廊下まで来たのだ、ここで真意を問いただしてみるか。

「……………曉美 ほむら。君はまどかに用事があるのではないのかね？」

「……………」

振り向いた暁美が私を睨む。

その瞳から感情を読み取るうとするが、微々たるものしか拾う事が出来なかった。

わずかながら見えたのは、私に対しての不審、困惑ぐらいだ。

何故私に困惑の視線を向けるのかは分からないが、まどかに何と話すかが判断の材料になるだろう……まあ、ミスリードも考慮しておくが。

「……………あるわ」

「私を気にせずに言えばいい。特にやましい事が無いのならな」

暫し睨み合い……………溜息を一つ付いた暁美が声を発する。

「鹿目 まどか、あなたは自分の人生が尊いと思う？ 家族や友達を、大切にしてる？」

衝撃。

何故……………何故、このような質問をまどかへと行う!?

言葉としてはありふれた言葉だが、そこに込められた意味は……………それを棄てても何かを為すのか？ という問いだ。

その問いは、衛宮 士郎のような壊れた人間へと向けられるべき問いのほずだ。

「え、えつと．．．．．私は、大切．．．．．だよ。家族も友達のみんなも大好きで、とつても大事な人たちだよ！」

まどかの問いに私は安堵するが、暁美はそれに満足がいかないのかさらに問う。

「本当に？」

「本当だよ！ 嘘なわけ無いよ」

そつだ、それでいいんだまどか。

「そう．．．．．もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうだなんて、絶対に思わないことね。さもなければ、全てを失うことになる」

暁美の言葉は全て事実裏付けされたような確信に満ちている。

まさか．．．．．彼女は．．．．．!？

「あなたは、鹿目 まどかのみまでいればいい。今まで通り、これからも．．．．．」

呆然と二人で暁美を見送る．．．．．いや、私だけで彼女に話を聞こう。

「まどか、私も少し保健室で休んでくる」

「え．．．．．ええつ!？」

廊下の角に消えた姿を追い、まどかを置いて私は駆けだした。

## 第一章 疑惑の転校生 (後書き)

いろいろと思いついてしまったので執筆しました。

最終的に最低でも、ほむら、杏子、マミさん、さやかを生存させてあげたい。

まどかはエンド的に無理かも……………。

## 第二章 転校生の秘密と未確認生物 (前書き)

何とか書き上げましたのですが、オリジナル部分が独自考察でいっぱいなので筋が通ってないかも……。やっぱり文を作るのって難しいなあ。

## 第二章 転校生の秘密と未確認生物

ガラツ……………。

保健室の戸を開き、中に入る。

「……………何の用かしら？」

「いや、少し君と話がしたくてね」

私へと明らかに警戒の目を向ける暁美。

先ほど思いついたことだが、さすがにほぼ魔法の領域なので確信を得るまでは質問は控える。

「……………私もあなたとは話をしたかった」

「それは重畳だな」

さて、何から話したのか……………そうだな、まずは同じ土俵に立つとしよう。

私がただの少女と思われているならば、そう深い話は聞けそうにない。

もつとも、それにはなんらかの異常を晒す事になるので、余計に警戒は深くなるだろうが。

「暁美、君は何故そうも濃い硝煙の匂いを漂わせているんだね？」

「っ!? ……!!」

驚愕の後、殺気が私に叩きつけられる。

しまった……まどかにあのような言葉を叩きつける彼女が、まどかの平穩を願っていないわけが無かるうに。

硝煙の匂いがかかるといふことは、ある程度銃器に精通している等などが理由として上げられる。

つまり、まどかの平穩を乱す存在になりかねないというわけだ。

こつも殺気を向けられては話どころではないので、両手を上げて敵意のない事を示す。

「そう殺気立たないでくれ。おそらく私は君と同じような目的を持っている」

「どついつ事?」

殺気が少し弱まったのを確認し、言葉を続ける。

「私もまどかの平穩を願う者ということだ。ただ、君ほどの一途さは持ち合わせていないがね」

「……いいわ、信じてあげる」

警戒心は以前より高いままだが、殺気は消えた。

暁美が一途だというのは、彼女の目にまとも映っていたのはまどかのみで、他の人は因子としてしか見ていないと見受けたから。

そして、そう判断できたのは、その他大勢を切り捨てても一つの対象だけを守るもの……私が切り捨てた中に存在したそれらと、同じ目をしていたからだ。

その判断と同時に、暁美がその目を逸らして言葉を紡ぎ始める。

「私から硝煙の匂いがするという話だけど、銃を扱っているからよ……あなたに言えるのはこれだけ」

「いや、構わない……私も自分の事をほとんど話していないのだから、それだけ聞けただけでも十分だ」

それで幾つか知りたい事が知れたのだから。

おそらく暁美は……超常の力を使用できる。

この判断に至った理由として挙げられるのは、彼女の貧弱さだ。

普通の女子中学生としては一般的な体格だが、銃器を扱うにしては細すぎる。

そして、彼女にも扱えるような銃器では、あそこまで濃い硝煙の匂いが染みつく事もない。

つまり、必要な力を何らかの力で補っていると判断できる。

また、彼女の体捌きがなっていないというのも上げられる。

銃器を扱うならば戦うのだろうが、それにしても素人のような体の動かし方をする。

つまり、そこまで体を使う必要のない能力を持っているか、敵が人ではないと判断できる。

そして、硝煙の匂いの濃さに見合う重火器で撃つべき人ではない相手は、超常の存在としか考えられないのである。

ここまで考えたところで、保健室の扉が開く。

「あ、ごめんなさい、待たせちゃったわね」

思考を普段通りに戻し、保健の先生へと対応する。

「すいません、少し頭痛がするので来ました」

「私も少し気分が悪かったので」

「うん、少し休んで行きなさい」

二人してベッドに案内され、私はサボリだなと思いつつ横になった。

どうも先生はここに残るようで、話の続きはできそうにない。

「暁美、話の続きは放課後に」

「今日はやる事がある、予定が付いたら教えるわ」

それは残念だ……が、この際つけてみるとするか。

先ほどの言葉を最後に、私たちは黙って時間を過ごすのだった。

私と暁美は一時間で教室へ戻り、放課後まで授業を受けた。

少し気になったのは、暁美の警戒の目や生徒の好奇の目以外に観察するかのような視線を感じた事か。

残念ながら、平和で鈍った感覚と一般レベルよりマシな程度の目の良さでは、その視線の主を見つけ出すことはできなかった。

「志保ちゃん、行かないの？」

「どーしたどーした？ また、こんなに眉間に皺を寄せて考え込んでるのだから」

「いけませんわ志保さん、せっかく綺麗な顔立ちをしていらっしやるのですから」

まどか達に話しかけられ、視線の主について考える事を止める。

「ああ、今日は少し外させてもらっていいか？」

「えー！？ 　　って言いたいけど、志保がそう言うってことは何か重要な用事があるんでしょ？ 　　だったら黙って送り

だすのがあたしたちの役目だ！……………なんてね」

お茶目に首を傾げたさやか言葉に、まどかと仁美が頷く。

まったく、私などにはもったくない友人たちだ。

「何の用事か知らないけど、頑張ってね志保ちゃん」

「ああ、ありがとうまどか」

まどかが笑顔と共にくれた声援に、私も笑顔で答える。

「ああ……………志保さんのそういうところがいけないのですわ」

「まったくだよ……………そりゃ、男女問わずに告白されて当然だわ」

「……………あはは、否定できない」

何が悪かったのか、私の悩みの種の話題にすり替わってしまった。

女になると、私が色恋沙汰に弱いのは変わらないらしい。

溜息をついて首を振ったところで、視界の端に曉美を捉える。

「じゃあ、さよならだ皆。また明日」

「うん、また明日」

「志保さんまた明日」

「じゃーねー志保」

まどか達と別れ、暁美の視線が外れるほど離れてから気配を消して隠れる。

肉体はただの少女になろうとも、この魂に宿った技術は失うことはない。

常人では私を視認しても、注意深くなければ見過ごしてしまうだろう。

少しして、まどか達をつけるように暁美が行動を開始した。

「……………」

私はただ黙って、彼女の後をつける。

「……………何を探しているんだ？」

しばらく暁美をつけて分かったのは、彼女がまどかの周りに何かを探しているという事だ。

「あれは……………なんだ？」

まどかの周囲を見ていた暁美の視線が固定された。

何があるのかと視線の先を見た私は、自然と眉間を険しくする事となる。

そこにいたのは白い小動物。

ただの小動物なら眉間を寄せることはしないだろうが、それが見た事もない生物かつ私の友人たちを見ていればこの反応も妥当だろう。

「……………動くか」

どうやら、あれがまどかの平穏を乱す存在のようだ。

気付かれないように抑えてはいるようだが、暁美から抑えきれない怒気と殺気が漏れている。

「動いたか」

暁美が飛び出し、その生物を路地裏へと蹴り込んで路地に入りこむ。

私も気配を多少晒しつつその後を追うと、光と共に彼女の服装が変わったのを目撃する。

「……………魔法少女？」

少し思いだせない……………いや、思い出したくないのだろう。記憶を刺激されたが、盾から銃を取りだした暁美を慎重に追う。

銃撃銃撃銃撃……………一発が小動物の足に命中し、追撃でおそらく死亡した。

おそらくというのは、あの状態からでも容易く再生する存在を嫌というほど知っているからである。

「……！」

暁美が再び走り出す、理由はあの小動物がまた出てきたからだ。

あの小動物は複数の肉体を持っているか、類似個体どうしで記録を共有できるような存在だと私は想定する。

「……ふっ！」

障害が多い道を気配を殺しながら駆け抜ける。

相反する要素はかなりの負担を私の体へ掛けるが、小動物のスペックが低めなのでなんとかついていける。

段々と回避を覚えたのか、明らかに暁美の銃撃が小動物に当たらなくなっている。

そして大型ビルへと侵入……私の記憶が確かなら、ここはいつもまどか達と遊びに来る場所のはず。

スタッフもいない倉庫エリアを駆け抜け、暁美を追う。

小動物はその体の小ささを利用して、人間が入れない道を通ることと撒こうとしているようだが、暁美も小動物を探知する術を持っているらしく逃さない。

だが、そのような術を持たない私は、入り組んだ倉庫の中で暁美

たちを見失ってしまった。

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・はあ」

息を整え、しっかりと酸素を取り込むことで頭を正常に運行させる。

追跡の手段は・・・・・・・・・・ある。

あまり使われないせいか倉庫には埃が薄く溜まり、よく見れば足跡が続いている。

足跡を探りながら駆け、ある部屋に入ったところで突風が吹く。

「こんなときに・・・・・・・・・・」

ようやく曉美を見つけたが、周囲の空間が変質する。

「曉美、これはなんだ？」

「！？ 衛宮 志保・・・・・・・・・・なぜここに？」

本当なら姿を現すつもりはなかったが、私自身も超常の物 おそらく結界に巻き込まれてしまったので、やむを得ず彼女と接触した。

「・・・・・・・・・・あなたも巻き込まれた以上、最低限の事は知ってもらう必要がある・・・・・・・・・・わ！」

「ああ、ぜひ教えて・・・・・・・・・・くれ!！」

私と暁美は、振り向きざまに後ろへ攻撃を繰り返す。

二人の後ろに髭のついた毛玉が居たので攻撃したのだが、暁美の攻撃でそれを散らすことはできたのに、私の攻撃では吹き飛ばすだけにとどまった。

威力自体はそう変わらないと思うので、力を纏っているかいないかが鍵のようだ。

「衛宮 志保、私はあなたを守る方法が無い。だから、あなたにも戦ってもらおうわ」

暁美が私に触れ、私の体が薄く光って軽くなる。

「助かる。どうも普通の攻撃は通らないようだからな」

この状態は、かつての私とまでは行かなくても、未熟な時の強化を使った程度の身体能力があるようだ。

「私はまどかを助けに行く、あなたもついてきて」

「了解だ」

かつて倉庫だった異常な空間を暁美が駆け、私もそれに追従する。

時折やってくる毛玉や蝶をいなしつつ、暁美の説明を受ける。

この空間を作ったのは魔女と呼ばれる存在で、今私たちが相手をしているのが使い魔らしい。

そして、それを狩るのが魔法少女の役目だそうだ。

「……………君の持つ情報はそれだけか？」

「……………」

まだ何かあるようだが、話してくれないようだ。

そうこうしているうちに結界が消え、まどかとさやか……………  
あとはもう一人、金髪を左右それぞれにロールした、魔法少女らし  
き人物を視界にとらえた。

「無事か！？ まどか、さやか！」

「し、志保ちゃん！？」

「し、志保！？」

私は二人の傍に降り立ち、二人の無事を確認する。

どうやら無傷のようで、安心して一息吐く。

「魔女は逃げたわ、仕留めたいならすぐに追いかけてなさい。今回  
はあなたに譲ってあげる」

私たちの事を横目に確認したもう一人の魔法少女が、暁美へと声  
をかける。

声は普通だが、その中には怒りが混ざっているのが分かる。

「私が用があるのは」

「呑み込みが悪いのね、見逃してあげるって言ってるの」

暁美が用があるのは、十中八九まどかの腕の中の小動物なのだろうが、魔法少女のドスが効いた声にそれを止められた。

「お互い、余計なトラブルとは無縁でいたいと思わない？」

暫し睨みあいが続く……私も現状を必要分すら把握出来ていないため、暁美の弁護どころか口をはさむ事もできない。

少しして暁美は振り返って去った……ただ、振りかえりきる前の極僅かな瞬間、彼女が泣きそうだったように見えたのは私の気のせいだろうか。

彼女が去ったことで、まどか達は緊張から抜け出した。

光が小動物を照らす。

魔法少女が手から光を発し、小動物を治療している。

暁美が与えた傷が消え、少女が治療を止める。

すると、小動物は目を開き、口も開かずに言葉を発する。

「ありがとうママ、助かったよ」

「お礼はこの子たちに、私は通りかかったただけだから」

「っ!？」

私の背中を悪寒が駆け抜ける。

私は技能の一つとして言葉から感情を読み取る術を覚えているのだが、小動物の言葉から感情を感じ取ることが出来なかった。

感情を隠そうと思えば隠す事も出来る………が、隠していれば分かるのだ。

そう、隠すという感情すらこれからは感じない………まるで機械のように。

「どうもありがとう、僕の名前はキュウベえ」

振り返ったこれは一切の感情を感じさせずに、明るい声質を以って言葉を発してくる。

「あなたが私を呼んだの？」

「そうだよ、鹿目 まどかに衛宮 志保、それと美樹 さやか」

「なんであたしたちの名前を………？」

こいつは迷いなくここへと向かってきていた、つまりはまどか達に目をつけていたのだろう。

待て………こいつは死んだときに次の個体が出てきていたが、何故暁美に狙われ続けたのだ？

「僕、君たちにお願いがあつてきたんだ」

「お、お願い？」

先ほどの様子から考えるに、私が暁美を見失っていた間にキュウベえをまどかが助け、そこに暁美が来たのだろう。

その時、まどかは暁美を恐れ、さやかは敵愾心を抱くだろう。

つまり、まどか達を暁美と敵対させるために、ここへ暁美を誘き出したのか。

「僕と契約して、魔法少女になって欲しいんだ」

そう首を傾げにこやかに言うキュウベえ………無感情な声では私には警戒心しか浮かばない。

「僕は、君たちの願いをなんでも一つ叶えてあげる」

「えっ、本当？」

キュウベえの言葉に、乗算の如くあがる私の警戒心。

「願回事？」

「なんだってかまわない、どんな奇跡だって起こして上げられる

「よ

あらゆる願いを叶える願望器………聖杯を思い出す。

おそらく、これも碌なものではないだろう。

まどか達が甘い言葉に浮足立つ中、私はキュウベえを険しい目で  
見つめるのだった。

## 第二章 転校生の秘密と未確認生物

(後書き)

まどマギ、一話部分を終了しました。

志保は能力は失っているものの、技術はちゃんと保持しています。

それにしてもキュウベえは胡散臭いことこの上ない………い

つかキュウベえさまあとしてやりたいですねw

まだまだ、原作からずれない………やっぱり、大きく変わる  
のは三話部分からになるかも。

### 第三章 魔法少女とは (前書き)

流魂記シリーズとは違って、原作というガイドがあるためサクサク進む……けど、どうにかしてガイドから外れないといけないジレンマ。

はぁ……流魂記も書きたいけど、中々進んでくれない。

ほとんど無から有と、有から有では難易度が違うなあ……。

### 第三章 魔法少女とは

「私は巴<sup>しんぱ</sup> マミ。あなた達と同じ見滝原中の三年生」

金髪ロールの少女 巴 マミが、駆け寄ってきたキュウベえを  
抱き上げ立ち上がり

「そして…… キュウベえと契約した魔法少女よ」

微笑みながら、彼女は自分の正体を明らかにした。

巴の先導に続き、私、まどか、さやかが夕暮れの道を歩く。

私たちは現在、巴の家へと招待され、案内されている最中である。  
会話が無いのは、今までの非日常を少しでも消化できるようにと、  
巴が配慮してくれたためだ。

丁度いいので、ここで少し考えを纏めるとしよう。

まずは曉美だが、おそらく彼女はキュウベえや魔法少女について  
詳しい事を知っているだろう。

だが、余程の事が無ければ、それらを彼女から聞くことは出来な  
いと思われる。

彼女はどうも、人間不信の嫌いがある……残念なことに、  
そうなるだけの事があったのだろう。

まどかに固執する原因と私に驚愕した理由については、さすがに  
推測出来そうにないな。

次はキュウベえだが……この上なく怪しい。

怪しいのは暁美も同じなのだが、まどかを守るうとしてるのが  
分かる上に、私を見捨てなかったのである程度信用はできる。

だがキュウベえは、その見た目と声質というフェイクに騙されな  
ければ、無感情だと分かる。

そして、あらゆる願いを叶えるという餌で、少女を魔法少女に・  
……さて、何か類似したものが無かったか？

「……そうか、世界か」

そう、キュウベえは世界に似ているのだ。

そして魔法少女の契約は、かつて私が世界と交わした守護者の契  
約とほぼ同一の内容である。

願いの対価に魔法少女へとその存在を変化させる。  
守護者

暁美は……サ・ヴァントとなった時の私と、同じような  
存在ではないか？

魔法の領域だと意識の隅に追いやっていたが、ここまでの共通点があるとそう思ってしまう。

もつとも、私は衛宮 士郎を殺す事が目的で、おそらくまどかを守る事が目的の曉美と比べるのはおこがましいだろうが。

自虐的な事実で苦笑いしたところで、巴が足を止める。

「このマンションよ」

その声に見上げると、かなり良い物件だろうマンションが目に入る。

前々から思っていたのだが、見滝原の生徒の家はかなり裕福だな。

そんなどうでもいい事を考えながら、巴に続いてエレベーターで上がる。

かなり高めの階にエレベーターが止まる、これくらいの高さになると景色も見ものだろう。

「ここよ……ふふっ、そんなに緊張しないでいいわよ」

「……お邪魔します」

扉を開けた巴に続くと、センスのいい部屋が視界に入る。

「うわー」

「素敵なお部屋」

「うん、センスがいい」

センスはいいのだが、少し気になる事が一点。

あまり人の事は言えないが、部屋の広さに対して家具が少なく寂寥感を覚える。

「一人暮らしだから遠慮しないで、碌におもてなしの準備もないのだけだ」

「いや、私たちが世話になるのだからあまり気にしないでくれ。むしろ、こちらが何か手伝うことはないか聞きたい」

中学生の一人暮らしなんて、あまり他人が踏み込んでいいような事情は無いだろう。

ただ、踏み込めないならば、親しくすることで気を紛らわせる程度はしてあげたいものだ。

「そうだね。ママさんにはお世話になりっぱなしだもんね」

「うんうん。ママさん、今ならお手伝い三人が漏れなく付いてきますよってね」

私たちの言葉に、巴は本当に嬉しそうに笑う。

「ありがとう。じゃあ、食器運び手伝ってもらっていいかしら？」

「はい...」

「了解した」

それだけでいいのかと思ったが、知り合ったばかりの後輩に何を任せるといふのだと自分を笑う。

ケーキにフォークを入れ、味わう。

「ママさん、すっごく美味しいです！」

「うん、めっちゃうますよ！」

「うん、美味しい……これは？ いや、か？」

「ありがとう」

まどかとさやかは純粹に感想を言っているのだが、私はレシピが気になって仕方が無い。

平和な世界でやる事が見当たらず、もともと趣味のようなものだった料理に力を入れたのだが、そのせいでレシピを解析しようとする性分になってしまった。

「あはは、相変わらずだね志保ちゃん」

「まあ、その探究心があるから、あんな美味しい料理作れるんじゃない？」

「……………ゴホン。すまない巴……………さん、本題に入ろうか」

咳払いをし、強引に話題変える。

それにしても、肉体と精神の年齢差が鬱陶しい。

精神は大人の私が、中学生の少女を年上のように呼ぶことに違和感が付きまとう。

「ママでいいわよ衛宮さん」

「すまない、助かる」

気を使われてしまった……………これではどちらが大人が分からんな。

微笑みながら私を見ていたママだが、すぐに顔を引き締める。

「あなた達もキュウベえに選ばれてしまった以上、魔法少女についての説明が必要よね」

「ああ、なるにしろならないにしろ、私たちは魔法少女の知識が無さ過ぎる」

もっとも、キュウベえと近いママが知っている情報だけでは、キュウベえに都合が悪い事が隠されている可能性も高いが。

ただ、ママが特に不利益を感じていないようなので、デメリット

はかなり根深いものだろう。

やはり、曉美からもどうにかして情報を得たいな。

「わあ……………綺麗」

まどかの声に、意識を思考から戻す。

まどかが反応したのは、マミが取り出したトパーズのような宝石か。

「これがソウルジェム。キュウベえによって選ばれた女の子が、契約によって生みだす宝石よ」

ソウルジェム、魂の宝石か……………嫌な予感しかないな。

マミは普通に生きているようなので、それが名前そのままというのではない……………か？

「魔力の源であり、魔法少女である事の証でもあるの」

魔力の源……………魔術回路のようなものだろうか。

「契約って？」

「さつきも話したけど、僕は君たちの願い事をなんでも一つだけ叶えてあげる」

倉庫での話か。

「どんな奇跡でも起こして上げられるよ」

「どんな奇跡も……か」

「金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか!？」

「いや、最後のはちょっと……」

浮かれるさやかに、それに消極的に突っ込むまどか。

普段ならそんな二人を微笑ましく思うのだが、今は苦々しく思う。

等価交換……魔術使いであろうとも魔術に関わる全ての物が承知する法則。

聖杯戦争の聖杯も、聖杯をめぐる殺し合いの儀式を必要とするが

「でも、それと引き換えに出来上がるのがソウルジェム。この石を手にしたものは、魔女と戦う使命を科されるんだ」

「魔女……?」

こちらも対価として戦う必要があるらしい。

「魔女って何なの? 魔法少女とは違うの?」

「願いから生まれるのが魔法少女だとすれば、魔女は呪いから生まれ存在なんだ」

呪い……碌なものではないな。

脳裏に浮かぶのは、あの肉塊と汚染された池。

薄れた記憶の中で、かつて言峰が言っていたその呪いの名前は……  
『アンリマユこの世の全ての悪』

だが、アンリマユとこの世界の魔女は何かが決定的に違う気がする……気がするのだが、それが何なのかが出てこない。

「不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ、そういう災いの種を世界にもたらしているんだ」

「理由がはっきりしない自殺や殺人事件は、かなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形のない悪意となって、人間を内側から蝕んでいくの」

マミの言葉に、私も気を引き締める。

引っかかりが何なのかはともかく、魔女はエミヤとして討たねばならぬ相手には違いないのだから。

「そんなやばい奴らがいるのに、どうしてだれも気付かないの？」

「魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さつき君たちが迷い込んだ、迷路のような場所がそうだよ」

「結構危ないところだったのよ」

「感謝する。まどかやさやかを助けて貰った事」

私や曉美が付いたところには全て終わっていたということとは、マミがいなければ二人の命は無かっただろう。

「いいのよ、私はその悲劇を減らすために戦っているのだから」

「……………マミはそれを辛いとは思わないのか？」

少し考え、マミに聞く。

私のような破綻者はそうそういないだろうが、自分という存在の扱い方を勘違いしている者もいるだろうから。

「当然辛いわ。命がけなのだから当然よ……………だから、あなた達も慎重に選んだ方がいい」

マミの答えに、表には出さずに安心する。

これで辛くないなどと返ってきたら、私は彼女の心を傷つける言葉を吐いただろうから。

「キユウベえに選ばれたあなた達には、どんな願いも叶えるチャンスがある。けれど、それは死と隣り合わせなのよ」

「え……………」

「悩むなあ」

「……………」

正直な所、すでに魔法少女となっているママはともかく、まどかやさやかにはそのまま平穏な暮らしをしていてもらいたい。

だが、彼女らが事実を知ってしまった以上、魔法少女ではない私の言葉では彼女たちを止めることはできないだろう。

そして、表層の事実しか見えない魔法少女になるのは私自身躊躇いがある。

衛宮 士郎ならすぐに飛びついた話なのだろうが、一度守護者として契約し地獄を見た私では、その契約が孕んだ見えないリスクが堪らなく恐ろしい。

もう、人を殺すだけの始末屋には戻りたくない。

「そこで提案なのだけど、三人ともしばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

「え!?!」

「なにを……!?!」

わざわざそんな危険な事を行うのかと焦るが、頭ではそれについてのメリットとデメリットを考えている。

メリットは、まどか達が恐れて手を引くかもしれない事、魔女がどういうものか見れる事か。

デメリットは、危険なのは当然として、ママが上手く立ち回ります

ぎてまどか達が容易に命を掛けてしまう事か。

彼女の戦いを見たことはないが、曉美と対峙した時の落ち付き具合から手慣れているのはうかがえる。

となると、デメリットが大きいか？

「その目で確かめてみればいいわ。その上で、危険を冒してまで叶えたい願いが有るのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの」

「……………危険すぎる。わざわざそんな危険を冒す必要はない」

「安心するといい衛宮 志保。マミはベテランだから、早々君たちを危険には晒さないよ」

ちっ……………迷いを抱えたままの私では、キュウベエの妨害を抑えて彼女たちを止める言葉が無いか。

となると、私もついて行き二人を守るのが最善だろう。

「まどかとさやかは行くのか？」

コクリと頷く二人……………仕方が無い。

「はあ……………分かった、私も付いて行く。ただ、私も戦えるようにしてくれマミ。強化してもらおう事で、雑魚ぐらいと戦える事は分かっている」

「……………わかったわ衛宮さん。鹿目さん達を守るのを手伝って頂戴」

さすがにママも渋るような仕草をしたが、私が退かぬと見て諦めたように了承した。

「そう言えば、あの転校生もママさんと同じ魔法少女なの？」

「そうね、間違いないわ。かなり強い力を持っているみたい」

さやか疑問にママが答える。

「でもそれなら、魔女をやっつける正義の味方なんだよね？」

正義の味方という言葉に口元が反応したが、今は関係無い事なので黙っている。

それに、正義の味方という言葉が、単純に受け取る分には分かりやすい言葉であると私も承知している。

「それが何でまどかを襲ったりしたわけ？」

「いや、曉美が襲っていたのはまどかでなく、キュウベえだ」

「そっだよ。おそらく彼女は、新しい魔法少女が生まれる事を阻止しようとしてたんだろうね」

暁美をフォローしたいのだが、暁美がまどかを守るつもりとしているのを確信できるのは私だけで、それを共有するのは難しい。

下手な事を言えば、私を騙した等と暁美の立場が余計悪くなりかねない。

「なんで？ 同じ敵と戦っているなら、仲間が多い方がいいんじゃないの？」

「それが、そうでもないの。寧ろ競争になることの方が多いのよね」

「そんな……どうして？」

マミの言葉に、だろうなと納得する。

見たところ魔女と戦うことは強制されていない、ならばそれを行う必要性が無ければ命を掛けてまで戦わないだろう。

「魔女を倒さなければペナルティが課せられるか、魔女を倒すことで何らかの報酬が得れるかといったところか？」

「そうよ……魔女を倒せば、それなりの見返りがあるのだから、時と場合によっては手がらの取り合いになってぶつかることもあるのよね」

はあ、報酬が何かは知らないが厄介だな。

「つまりあいつは、キュウベえがまどかに声をかけるって、最初から目星をつけていて。それで朝からあんなに絡んできたってわけ

「？」

「おそらくそうだが、目的はライバルを減らすことで無く、まどかを危険から遠ざけるためかも知れないぞ」

「……………それもありそうね。キュウベえが襲われていたからつい色眼鏡で見ってしまったけど、鹿目さんのような普通の子を戦いから遠ざけるのは当然かもしれないわね」

「どうにか暁美のフォーローを入れられたが、まだまだどう転ぶかは分からないか。」

「この世界での鍵はおそらく暁美だろうから、出来る限り仲を取り持ってやりたいところだ。」

「だが、あの無表情少女を脳裏に浮かべると、悪い方へ傾くと思えなくて頭痛に頭を抱えなくなる。」

「他にも魔女退治見学、目の前のUMA、暁美の正体、魔法少女や魔女の本質など、問題が多すぎる。」

「はあ……………前途多難だ」

「なんだか遣る瀬無くなって、私は天井を仰いだ。」

### 第三章 魔法少女とは (後書き)

なんだか、毎回おんなじような内容な気がする。

しかも、志保の独白ばっかだ……。もつと、キャラの動きを表現できるようにしたい。

原作から外れるのは確定しているけど、真新しい話にできるかどうか分かれ目か……。

## 第四章 魔女退治見学 (前書き)

切るところが見つからなくて、いつもの倍近くになってしまったし。それにしても戦闘描写少ねえ……書き方教えて、ウロえもーん！

## 第四章 魔女退治見学

「く……………」

欠伸を噛み殺し、私は体を起こす。

いつもなら朝日が部屋に降り注いでいるが、今は早朝の為薄暗い。ベットから出て運動用の服に着替える。

収納スペースから、ある物が入った袋を取り出して肩に提げて部屋を出る。

洗面所で軽く身だしなみを整えてから、庭へ向かう。

「…………よし」

袋の内の物を取り出し、私は体を動かし始めた。

「いつてきます」

誰もいない家にそう告げ、いつも通りの時間に家を出る。

いつもと違うのは、朝にとりだした袋を持っているという点くらいである。

今日も天気がよく、日差しと風が心地よい。

いつもの場所まで来て、私は友人を待つ。

肩に提げた袋の位置を調整し、ふと自分の掌を見る。

その手は少女の手にしては、堅く厚い皮で覆われている。

「仕方が無いのは分かっているが、どうにもこの差異は厳しいものがあるな」

男と女では肉体スペックに大きな差がある。

いかに努力しようと、かつての性能を取り戻せない事に少し苛立ちを覚える。

「……とはいえ、私はやることをやるだけだ」

性能が落ちようと、やることは変わらない。

足りないのなら他から持ってきて補えばいい、今までもそうしてきたのだから。

「ん……仁美？」

何故か鞆も持っていない仁美が走ってきたので、挨拶をしようと手を挙げたのだが

「おはよ……っ?」

そのまま走って行ってしまった。

何があったのだろうか……まさか暴漢でも出たか!?

仁美が来た方向へと駆け出し、袋の中身を取り出そうとしたところまでかとさやかが現れた。

「……まどか、さやか、無事か!」

「「……へ?」」

呆ける二人……よく見ると仁美の鞆をさやかが持っている。

「……すまない、早とちりしただけだ」

「そ、そうなんだ」

天然気味なところのある仁美の事だから、よくわからない事で暴走でもしたのだろう。

少し眉間を揉み解してから、袋の口を閉じ直す。

意識を平常に戻し、まどかの肩にいる奴に目を向ける。

「キユウベえか……学校に連れて行っても問題ないのか?」

「うん、大丈夫みたい。ママとか仁美ちゃんには見えてなかったよ」

もし見えていたら、未確認生物として少しは騒ぎになるだろうし

な。

『あとさ志保、こんなふうにはテレパシー出来るんだって』

『思考を飛ばすようなイメージで考えてくれれば、僕が中継するよ』

『こんな感じか？』

『うん、そんな感じ』

パスでの会話のようだな。

そんな感想を抱いていると、まどかが重大な何かを思い出したかのように頭を上げる。

「あつ！ 仁美ちゃん追いかけないと」

「やばっ！？ 絶対怒ってるよ」

「ああ……しまったな」

それもこれもキュウベえが悪い……と、精神衛生上の問題でキュウベえに罪を擦り付ける。

軽く足の筋を伸ばし、駆ける準備をし

「それでは、お姫様を追いかけるとするか」

「おー！」「」

私たちは、一斉に駆けだした。

「ごめんね仁美ちゃん」

「仁美ごめん！」

「すまない仁美」

「どうせ私なんて、簡単に忘れられてしまう存在なのですわ」

口を尖らせそつばを向く仁美に、皆で謝る。

元の原因はまどかとさやか（間接的にキュウベえ）だが、私も忘れて話し込んでしまっていたので謝る。

しばらく謝り通して、ようやく仁美が許してくれた。

そろそろ時間なので席に着いくと、さやかがテレパシーで話し始める。

『つーかさあ。あんた、のこのご学校までついて来ちゃってよかったの？』

『どづして？』

キュウベえは見えてないから何も問題は……ああ、暁美か。

暁美を潜在的な味方と判断していたため、その事がすぐに出てこなかった。

『いや、問題ないだろう。そもそも、生徒たちの前で大立ち回りをするわけにもいかないだろうしな。それに、私もマミもいる』

寧ろキュウベえを排除してほしいものだと思いながら、さやかのか心配を取り除く。

『マミさんは三年生だから、クラスはちょっと遠いと思うけど…』

…

『ご心配なく、話はちゃんと聞こえているわ』

『この程度の距離なら、テレパシーの圏内だよ』

脳裏にマミの声が響き渡る……キュウベえのテレパシーは、中々範囲が広いようだ。

『お、おはようございます』

『おはよう鹿目さん。それとキュウベえに美樹さんと衛宮さんも』

『おはようマミ』

『おはよういづれさまマミおねえ』

『ああ、おはようマミ』

皆で挨拶を交わす……友人たちを危険に巻き込む忌々しい魔法も、  
こつこつ用途なら受け入れられるのだがな。

『あつ……………』

『げえ……………』

まどかとさやかが、教室に入ってきた暁美に声を上げる。

座った暁美は顔をこちらに向け、キュウベえ……………いや、まどかを  
見たまま動かない。

おそらく、キュウベえとまどかが近くにいるため心配なのだろう  
……………相変わらず感情を測るのに苦労するが。

『うーん。あの無表情がまどかを守ろうとしているのかねー？』

『……………感情表現が苦手なのだろう。戦いに染まりすぎたのかもし  
れないな』

『……………それはよく解るわ、魔法少女の戦いは過酷なもの。下手す  
れば、私もああなっていたのかもしれないのね』

『ほむらちゃん……………』

戦いにおいて感情の動きで命取りになる事が多く、戦闘者がそれ  
を棄ててしまうことは多々ある……………私自身も、以前はそれを棄てて  
戦っていた。

おそらく彼女も、戦い続けるうちに棄てて……………いや、削ぎ落され

てしまったのだろう。

彼女が命を賭しているだろう事、それ以外で感情を大きく表す事は無いかもしれないな。

蒼い空を雲が流れていく。

昼休み、私たちは学校の屋上に来ていた。

ここの屋上はかなりいい場所なのだが、如何せん学校が大きいせいで、来るのを面倒がって人がいない。

居るとすれば、心置きなく内緒話をしたい私たちのような人間ばかりか。

丁度仁美は用事があったので、無理に離れる必要が無くて助かった。

「はいっ」

「あーん……むぐむぐ」

まどかがおかずをキュウベえに与える。

見た目は美味そうに食べているが、おそらく何とも感じていないのだろうな。

「ねえまどか……願い事、何か考えた？」

「ううん……志保ちゃんはどう？」

「私も何も考えていないな。そもそも私には、人に叶えて貰うような願いは無いからな」

欲が無いというよりは、内に何も無いから欲が出ないといったところだが。

「私もなーんにも思いつかない……まあ、志保みたいに高尚な理由じゃないけどね」

「いや、さやかの反応が普通だ。私は単にずれているだけだからな」

オブジェクトに包んで言う……二人に壊れているなどと言うのは、二人への破壊力が大きすぎる。

「そうかもね。なんでキュウベえは、私達みたいな普通の中学生のところに来ちゃったんだか……こんな幸せバカな私達より、よっぽど必要としている子がいるはずなのに」

「さやかちゃん……」

「さやか……」

誰かを瞳に投影し、しんみりというさやか。

その誰かは、間違いなく彼女の幼馴染だろう。

『かみじょう  
上条 恭介』

さやかの幼馴染で、将来有望なヴァイオリニストだった……そう、  
だったのだ。

事故に遭い、指が動かなくなったらしい。

リハビリで指は動くようになるとさやかは言っていたが、そのと  
きの無理をした笑顔から、もう元のようにヴァイオリンを弾けない  
のだろうと推測するのは容易かった。

「……っ!?」

足音に二人が反応する。

やってきたのは暁美……来るとは思っていた。

暁美の無言の圧力に、まどかとさやかが警戒する。

『大丈夫。もしもの事があっても傍にいるから』

造られた目的のよくわからない尖塔に、ママが現れる。

三年の教室からならば、あそこの方が近いからか。

ママを横目に確認しつつ、暁美が近づいて……数歩先で止まった。

「何の用よ転校生」

「鹿目 まどかに確認をしに来たわ。あなたが、魔法少女になるつもりなのかを」

「わ、私は……」

暁美の威圧感に、明確な答えが無いため口ごもるまどか。

そんなまどかに焦れたのか、再び暁美が口を開く。

「昨日の話、覚えてる？」

「うん……」

渡り廊下での話が……まどかも、今ならその意味が理解できるだろう。

「ならいいわ。忠告が無駄にならないように祈ってる」

そう暁美は言うが、まどかの内心の問題故に、祈るしかないのだろう。

言うことは言ったのか、踵を返して暁美が去る。

「ほ、ほむらちゃん。あの……あなたはどんな願い事をして、魔法少女になったの？」

ぴたりと暁美が止まり……いや、止められて振り向く。

じつとこちらを……まどかを見て、何も言わずに去って行った。

放課後になり、三人でロッカーから荷物を出そうとしている仁美の元へ向かう。

「仁美、ごめん。今日はあたしらちょっと野暮用があつて……」

「あら、内緒ことですよ……？」

「えっと……」

問いにまどかが口ごもり、私が話を捏造しようとするが

「羨ましいですわ！ もう、お二人の間に割り込む余地なんて、無いんですねー！」

「あ……」

「だから違うってそれ……」

「私は眼中にないのか……」

今一緒にいたはずなのに、完璧にスルーされて少し凹んだ。

私たちはいつも利用する喫茶店で、メンバーへ仁美の代わりにママを入れて一服していた。

皆が飲み物を飲み終わり、一段落ついたところでマミが話を切り出す。

「さて、それじゃあ魔法少女体験コース第一弾……張り切って言うてみましょうか。準備は良い？」

「準備になっているかどうか分からないけど……持ってきました  
」！  
」

張り切ってさやかが取り出したのは……金属バット。

おいおい、こんなところで掲げるな、周りから不審な目で見られているぞ。

「何も無いよりは、ましかと思って」

「ま、まあ……そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」

マミが困るのも良く分かる。

が、さすがにこのままというのもいただけないので、私も口を出  
す。

「とても私には持てそうにない覚悟だな」

「あ……あはは……」

肩をすくめて周りを視線で示すと、周りの視線にようやく気が付いたさやかが、バットを引っ込めて小さくなった。

それにより、見ていた人も興味を失って自分たちの世界へ戻る。

「え、えーと、ほら……志保とまどかは何か持ってきた？」

「え、えつと……私は」

さやかに促され、まどかが取り出したのは一冊のノート。

そこに描かれていたのは、デフォルメされたマミと暁美の魔法少女姿と、それっぽいまどかの姿だった。

「と、とりあえず衣装だけでも考えておこうかと思って」

まどかの言葉とノートが余りにも微笑ましく、私たちは大笑いする。

そのせいでまどかは茹ってしまった。

「うん、意気込みとしては十分ね」

「こりゃまいった、あなたには負けるわ」

「ああ、実際に着たら可愛らしいだろうな」

「うう……」

少しの間、小さくなったまどかを見て、皆で和んだ。

扉の音が大きく響き渡る。

私たちは今、昨日結界が展開された場所へと来ている。

ここへ来たところで、マミが指輪を変化させてソウルジエムを取り出す。

「これが、昨日の魔女が残っていた魔力の痕跡」

ソウルジエムが一定の間隔で輝く。

おそらくは、魔力が濃いところに近寄るほど反応が速くなるのか。

「基本的に、魔女探しは足頼みよ。こうして、ソウルジエムが捉える魔女の気配を辿っていくわけ」

「意外と地味ですね」

「大抵、何事も地道な作業を要するものだ」

マミが動き始めたので、私たちも続く。

ソウルジエムを見ながら真剣な面持ちで歩き続けるが、中々輝きに変化が見られない。

「光、全然変わらないっすね」

「取り逃がしてから、一晩経っちゃったからね……足跡も薄くな

ってるわ」

取り逃したせいで、誰か犠牲になってしまったのだろうか。

「あの時、すぐ追いかけていたら」

「仕留められたかもしれないわね。だけど……あなた達を放っておいてまで優先することじゃなかったわ」

一瞬、自分達と、とり逃したことで出ているかもしれない犠牲を天秤に掛けた自分に辟易する。

「ごめんなさい……」

「いいのよ」

「まどか、そこはありがとうだ」

「そうそう！　すぐ謝っちゃうのがまどかの悪いところだ！」

気落ちするまどかを励ますようにさやかが絡む……やっぱりこの二人は良い友人だな。

その二人を横目に、私とマミは微笑みあった。

煌々と輝いていた夕日も薄暗くなってきたころに、さやかが口を開く。

「ねえママさん。魔女のいる場所……せめて、目星ぐらいはつけられないの?」

「魔女の呪いの影響で割と多いのは……交通事故や傷害事件よね。だから、大きな道路や喧嘩が起きそうな歓楽街は優先的にチェックしないと」

私としては、ママみたいな少女に夜の歓楽街へ行つてほしくは無いが……仕方が無いのか。

「後は……自殺に向いてそんな人気のない場所。それから、病院とかに取りつかれると最悪よ」

そうなれば大参事だろうな。

「ただでさえ弱っている人たちから生命力が吸い上げられるから、目も当てられない事になる」

思いだすのはライダーの結界によって衰弱した学生たち……くっ、やはり私も魔法少女になるべきか?

リスクに足踏みしたくなるが、それで命が救えるならと思つてしまふ。

忘れるな……それで私は多くの命を殺したのだぞ。

「……かなり強い魔力の波動だわ」

ソウルジェムの輝きに意識を現実に戻し、すぐに戦術を練り始め

る。

「近いかも……」

さつと周囲を見渡し、車も何も置かれて居なく、周囲に草木が生えたままのビルを見つける。

「あのビルはどうだ？」

「ええ、おそらくあそこね、急ぎましょう」

全員で駆けだし、私は走りながら袋から得物を取り出す。

「わ、何それ志保!？」

「模擬刀だ、親父の伝手で少しな」

取り出したのは干将莫耶……を模した模擬刀。

切嗣の伝手で知り合った鍛冶師に打ってもらったものだ。

そう言っているうちに、目的のビルに到着する。

「間違いない、ここよ!」

「マミさん、上!」

さやかが上を指し示し、そこには丁度飛び降りた人影が!

マミが変身して腕を掲げると、輝く紐が人影をゆったりと受け止

めた。

飛び降りたのは女性の様で、今は気絶している。

「魔法の口づけ……やっぱりね」

女性の首筋に何かの紋章が描かれており、これが魔法の口づけなのだろうと判断できる。

「こ、この人は？」

「大丈夫、気を失っているだけ……行くわよ！」

ビルに入り、マミが慎重に進む。

そして、現れる結界の入り口らしきものが現れる。

「今日こそ逃がさないわよ」

「ああ、ここで仕留めよう」

マミの言葉に応え、マミに干将と莫耶を強化してもらう。

刃が付き、雑魚は紙の様に切れるだろう。

そして、さやかバットも強化……というよりは変化させられてメイスのようになる。

「気休め程度だけど、これで身を守ることぐらい程度の役に立つわ。だけど、絶対に私の傍を離れないでね」

「はい！」

「了解した……さすがに、今の私では心もとないからな」

もつとも、不測の事態で離れることになっても大丈夫そうだが。

ちらりと入口をみると、ほんの少しだけ人の影が入り込んでいる。

頭の中である無表情を思い浮かべ、口元を歪めながら結界に侵入した。

階段を駆け上がる。

どうやら、結界内部の地形は現実と似るらしい。

カイゼル髭の雑魚が薔薇をリレーしているのを横目に、上へ上へと進む。

結界の景色に何か引掛かるが、いつ戦闘になるか分からないため、余計な事は考えない。

階段が終わったところで、蝶をモチーフにした雑魚が行く手を阻むが、マミが取り出したマスケット銃の一撃で一蹴される。

あの距離で銃ということは、近接用の技は無いようだ。

先導するマミの代わりに、後ろから来る雑魚を切り捨てつつ進む。

「どう、怖い？ 二人とも」

「な、なんてことねえって！」

「どうやら、私は数に入っていないようだ……まあ、今の私を見れば問題ないと思うか。」

しばらく進むと群れで襲ってきたが、雑魚の耐久力は低いため、すぐ始末した。

「頑張つて、もうすぐ結界の最深部だ」

キュウベエの言葉通り、突き当りにたどり着く。

そこには扉があり、それを守るように雑魚が群れているが

「ふっ！」

マミが並べたマスケット銃により、一掃された。

そして扉を抜けると、そこに親玉らしきものがいた。

極彩色の胴体に蝶のような羽、頭部はゲル状で複眼だが、あれは薔薇がモチーフ……なのか？

「見て、あれが魔女よ」

「うあ……グロイ」

「あんなのと……戦うんですか？」

「どう動くのか想像しにくいな」

動きの予想できない奴を相手にするには、今の私では防御力が心もとなすぎる。

マミが危険になるまでは観戦か、聖杯戦争初期の衛宮 士郎のように足手まといになる気は無いからな。

「大丈夫、負けるもんですか」

そう言つと、さやか of メイスを逆さに地面へ叩き付け、防御用の結界が張られる。

「さがつてて」

マミが飛び降り、優雅に着地。

細々といる何かを踏みつぶすと、奴が動き始める 戦闘開始だ。

マミは所々からマスケット銃を取り出して撃つが……次から次へと出てくる様は、私の投影のようだ。

それにしても、動きを予想できないとは言ったが、あの巨体で壁走りするのはどうかと思う。

「っ!？」

「「ママさん!?!」」

ママに纏わりついた何かが触手へと変わり、ママを拘束する。

「ふっ!」

「志保!?! …… つて、すご!?!」

幸い防御結界は内から外へ出れるようなので、干将莫耶を投擲してママの拘束を解く。

ママも一瞬驚いたようだが、すぐに体制を立て直した。

「かつこ悪いところを見せちゃったけど、これで終わり!」

ママが手を奴に手を向けると、ママによってつけられた弾痕から紐が出て奴を拘束した。

拘束を確認したママはリボンを解き、それが渦巻いて巨大なマスキット銃へとなる。

「ティロ・ファイナーレ!」

サイズに見合った威力の一撃が奴の頭部を吹き飛ばし、奴を消滅させた。

そして、どこからともなく取り出した紅茶を一服……か。

「か、勝ったの?」

「すごい！」

「……」

周囲の空間が歪み、結界が消える。

私たちは、現実の空間へと戻ってきた。

マミが何かを拾ってこちらに見せようとしているが、今はどうでもいい。

「マミ」

「何かしら衛宮さっ!?!」

振り向いたマミに、拳骨を落とした。

「し、志保!?!」

「志保ちゃん!?!」

まどかとさやかが驚愕するが、これはマミの為である。

「痛た……なにをするのよ衛宮さん」

「調子に乗っていた馬鹿者に灸を据えただけだ」

「どづいつ事さ志保?」

私が何に怒っていたのか、分かっている三人に説明する。

「はあ……マミに聞くが、何故最後に紅茶なぞ飲んだ？」

「え……そ、それは、ちょっと格好付けたくて……」

そうだろうな、そうでなければあんなことはしないだろうな！

「馬鹿か！ 確実に終わったと決まった訳でもないのに、あんな余裕を晒す阿呆がどこにいる！」

「……ひゃん!？」

「み、耳が……」

「きーんって」

さすがにボリュームが大きすぎたようなので、音を抑えつつ私は続ける。

「第一、あの時点で結界は消えてなかった上に、雑魚もまだ消滅していなかった。そんな中で気を抜いて紅茶を飲むだと、お前は戦いを舐めているのか！ うん……魔力の気配が無くなった？ それがどうした。奴が魔力を隠す能力を持っていたかもしれないだろうが。そもそもだな、武術においては残心という言葉が有ってだな

」

〳〳英霊エミヤの有りがたいお言葉継続中〳〳

「だ、分かったか？」

「は、はい分かりました！」

ビシツという擬音が付くぐらいの気を付けを見せるママに、よく理解したようだなと頷く私。

「……私、志保の事だけは絶対怒らせないようにするわ」

「……うん、私もそうする」

そこ、これはママの為だからな？

「ふう……分かってくれて何よりだ。あんな油断が原因で、大切な友人を失いたくは無いんでな」

「……あ、ありがとう」

眉間から力を抜き、本音を告げる。

「あーあ……まただよ」

「あはは……志保ちゃんらしいと言えばらしいかな」

「ごほん……それでママ、さっき拾っていたのは何だ？」

「え……あ、これね！これはグリーンフシード、魔女の卵よ」

どうも、ママの掌の上にコマのように立つ黒い物体は、魔女の卵らしい。

「魔女の卵……」

「運が良ければ、ときどき魔女が持ち歩いてる事があるの」

「危険は無いのか？」

「大丈夫。その状態では安全だよ。むしろ役に立つ、貴重なものだ」

ふむ、これが魔女退治の報酬という訳か。

「私のソウルジェム、昨夜よりちょっと色が濁っているでしょう？」

「そういえば……」

そう言われれば、確かに輝きがくすんで見える。

「でも、グリーンフシードを使えば……ほら」

ソウルジェムをグリーンフシードへ近づけると、そのくすみグリーンフシードへと移って、ソウルジェムが眩いばかりの輝きを取り戻していた。

「綺麗になった……」

「……ね。これで消耗した魔力も元通り。前に話した、魔女退治の見返りって言うのがこれ」

魔力が元通り？

「……今のを見た限りでは、グリーンシードからソウルジェムへはなにも移っていないようだが？」

「グリーンシードに穢れを与えることで発生する魔力を吸収させたのさ」

胡散臭いが、今は信じておいてやるか。

ここでは真実を得ることはできそうにないからな。

それにしても、彼女は出てこないのか……人知れず見守るのでもいいが、私ではないのだから見返りぐらいは受けておけ。

「で、だ。陰から護衛御苦労、曉美」

「……そう言う訳ではないわ」

「ほ、ほむらちゃん!？」

「転校生!？」

出てきた曉美はついつと顔をそむけて答えた。

そんな曉美に、まどかが近寄り口を開く。

「見守ってくれて、ありがとうほむらちゃん!」

「……別に」

言葉と表情は素っ気ないが、頬が染まっているのを見れば照れているのがよく分かる。

やはり、暁美の感情を引き出すにはまどかが一番のようだ。

「ありがとうー転校生……うーん、ほむらって呼んでいい？」

「……別に」

今度は本当にそっけない……結構容赦ないんだな。

まどかとの扱いの違いにオーバーアクションをするさやかに、マミと苦笑し合う。

そして、マミは一步前に出て何かを暁美に渡す。

「上げるわ、暁美さん」

「……これはあなたの物」

渡されたグリーンフィードを返そうとする暁美だが、マミは受け取らず押し付ける。

「いいのよ、これはお礼だもの。今回、私が死ぬかもしれない油断をしたの。そうなら鹿目さんや美樹さんが死んでたかもしれない。でもあなたが見守ってくれてたおかげで、少し罪悪感を和らげて貰ったのよ」

「……貰っておくわ」

む、少しマミに言い過ぎたか？

そうは思ったが、多少気にするぐらい言っておいた方が、後々まで残るかと思ったので気にしないでおく。

「……鹿目 まどか。バ マミはベテランだからああも簡単にいったけど、本当はもっと危険だと覚えておきなさい」

「あ、ほむらちゃん……」

最後にまどかへ忠告して去るあたりが、曉美らしい。

「完全に暗くなる前に帰るとしましょう」

「あ、あの女の人どうしたかな？」

「やれやれ、まずは下に降りるとしようか」

先に皆を行かせ、干将莫耶を拾ってから後を追って降りるのだった。

#### 第四章 魔女退治見学 (後書き)

志保たちの思うがままに動かさせてたら、なんだかほむほむがいい  
雰囲気を迎え入れられたぜ！

というわけで、特に和解イベント書く予定もなかったのに、志保が  
勝手にしたフォローでいい雰囲気。

なお、ほむほむは帰宅後、いままでの悲しさと、まどかからのお礼  
の嬉しさで泣き笑い状態です……なお、嬉し泣きではありません。

それにしても、予定外にクロス主お得意のSEKKYOUが出てし  
まった……何故だ？

しかも、これでマミさんの生存フラグ立ったし……わけがわからな  
いよ。

## 第五章 守るべきもの (前書き)

だんだん原作から外れていってます……自分の予定からも外れてい  
つてます。

皆勝手に動き過ぎです……そこが愛らしいのですがねw

## 第五章 守るべきもの

「ティロ・ファイナーレ！」

大砲の一撃で、影で描かれたライオンが消滅する。

マミは油断なく周辺を警戒し、結界が消えて少ししてから警戒を解く。

「いやー、やっぱりマミさんってかっこいいね」

「もう……見世物じゃないのよ。危ないことしてるっていう意識は忘れないでいてほしいわ」

マミは変身を解き、街頭の上から飛び降りる。

「そっだぞさやか。前に曉美も言っていたが、こつも簡単に行くのはマミが強いからだぞ」

「わかってます」

「はあ……本当に分かってるのかしら」

マミは溜息を吐き、困ったものだと頭を振る。

「あ……グリーンシード落とさなかったね」

「今のは、魔女から分裂した使い魔でしかないからね、グリーンシードは持ってないよ」

魔女に見えるだけの力があつたが、あれで使い魔だったのか。

「あれほど強力な使い魔もいるのか」

「今の使い魔は大分成長していたからね。もう少して、魔女になつていたかもしれないわ」

使い魔は魔女になるのか……有る程度成長するまでは、魔女の消滅に巻き込まれて消えているようなのが幸いか。

「使い魔つて、魔女になるんですか？」

「ええ、分化元の魔女と同じ魔女になるわ」

「魔女が増えると言うことは、さらに使い魔が分化するということだから、そうなる前に阻止したいところだな」

「うへー、鼠算かよ……」

そこまで爆発的に増えないだけ良いが……どっちにしろ駆除は面倒だな。

「それじゃあ、行きましようか」

ママの声に従い、皆で帰路に着く。

「三人とも、何か願い事は見つかった？」

歩きながら、マミが質問してくる。

「うーん……まどかは？」

「全然……志保ちゃんは？」

「私も特に思いつかないな」

そもそも、魔法少女になる事を忌避して、考えないようにしてしまっていた。

この先、なにがあるか分からないため、しっかりと考えておく必要があるな……恒久的世界平和ぐらいしか思いつかんが。

だが、愚者の夢に世界を巻き込む訳にもいかない……どうしたものか。

「まあ、そんなものよね。いざ考えろと言われたら」

「マミさんはどんな願いごとをしたんですか？」

パタリと、マミの足が止まる。

「辛い事なら、無理に話す必要もないぞ」

「いいえ……あなた達には聞いておいて貰いたいわ」

暫し目をつぶり、再び開いた瞳で遠くを望むマミ。

「まあ、願い事と言える願いでも無かったけどね。あの時は、考  
えてる余裕もなかったから」

以前にマミは、不幸を減らすために戦っていると言っていた。

おそらくは死にける何かがあつて、そこで契約をしたのか。

「今の生き方には後悔していないわ……あそこで死んじゃうより  
はずっとよかつたって思ってるから」

「そうだな。マミが生きていてくれたおかげで、まどかもさやか  
もここにいるんだ。君は誇っていい」

少ししんみりしていたので、マミを元気づける。

それに、私のような理解されない救い手に、彼女がなる必要は無  
いのだから。

「ありがとうございますマミさん！」

「ありがとうございます！」

「あなた達……ふふっ、ありがとう」

救った者たちから感謝される……その正常な有り様に、自然と笑  
みが漏れる。

「それでね、あなた達みたいに選択の余地のある子には、きちん  
と考えて答えを出してほしいの」

再び歩を進め始め、私たちの前にたったママが振り向き言う。

「魔法少女になるかならないか、どんな願いを叶えるか……私には出来なかったことだから」

「そうだな、私たちには悩めるだけの余裕がある。まどかもさやかもよく考えて、後悔だけはしないようにするといい」

「ママさん、志保ちゃん……」

まどかもさやかもいい子だ……いい子だからこそ、安易に人の為と言って動かないで欲しいものだ。

「ん……さやか？」

「美樹さん？」

「さやかちゃん？」

さやかの足音が無くなったので振り向くと、そこには考え込むさやかの姿があった。

「ねえ、ママさん。願い事って、自分の為の事柄でなきゃ駄目なのかな？」

「え？」

上条の事か……あまりよい予感はないな。

私のような異常者では無いさやかは、必ず自分に還る願いを願う

べきだ……それが命を掛ける事柄だからこそ特に。

「例えば、例えばの話なんだけどさ。あたしなんかより余程困っている人がいて、その人の為に願い事をするのは……」

「止めておけ」

自分が思っている以上に鋭い声が出る。

「志保ちゃん？」

「衛宮さん？」

「ど、どうしてよ志保!？」

さやかからは嫌われるかもしれんが、先達として道を踏み外すのを見ている訳には行かない。

「他人の願いを自分が叶えるなどと、思いあがり甚だしい。そのような事をすれば、自らと相手の齟齬で必ず不幸になるぞ」

「な……」

絶句するさやか。

可哀想ではあるが、事が事だけに現実を教えなければならぬ。

「いくら親しかろうと、結局それは他人でしかないのだ……自分ではない。そら、ズレが生じない訳が無いだろう？ 奇跡なぞ扱うのだからなおさらだ」

「私はただ……」

詰まるさやかに、なお言葉を重ねる。

「そもそも、さやかは何のために他人への奇跡を願う？」

「それは、恭介にまたヴァイオリンを弾いて欲しくて……」

「……それは本当なの美樹さん？」

「マ、マミさん!？」

マミも真剣な顔で話に入ってくる。

私一人で言うよりも効果があるだろうから、助かる。

「嘘な訳っ！」

「それは、その彼の恩人になりたい訳ではないと、とってもしいのよね？」

さやかが怒りを顕わにするが、マミの言葉で青ざめる。

「そこで少しでも詰まるということとは、そう言うことだ。別にそれは悪くない、寧ろ人間として正常な証だ」

「でも……あたし、そんな、最低な……」

「うづん……皆どこかしら見返りを求めているものよ。最近まで

気が付かなかったけど、私もそう」

おそらくママも、人の為という言葉を履き違えていたのだろう。

だが、まどかとさやかを助けて、礼を言われることでそれに気づけたのか。

何とまた……壊れている私なその言葉よりも、よっぽど説得力があるではないか。

「衛宮さんが言うように他人との齟齬も重要だけど、その土台の自分を勘違いしては駄目よ」

「……はい……っ！」

泣きだしたさやかをママは抱きしめて、あやすように背中を叩く。

トントントンと、静かな夜空に音が響く。

しばらくして、落ちついたさやかがママから離れる。

「さやかちゃん……これ」

「あ、ありがとうまどか」

まどかが渡したハンカチで涙を拭い、目を腫らしながらもいつもの笑顔に戻るさやか。

「かつこ悪いとこ見せちゃったね」

「そんなことないよ。私だったらもつと泣いちゃってた」

もう大丈夫だろうとマミと目配せし合い、私たちも会話に参加する。

「鹿目さんは泣き虫なのね」

「ああ、私の知る限りもつとも涙もろい」

「ふえ……そ、そんな事ないよ！」

「この間、映画で号泣してたのは誰だったかなー？」

復活したさやかもまどかを弄り始め、私たちの帰り道に笑い声（一部情けない声）が響き渡るのだった。

s i d e  
// マミ

静かな町に足音を響かせて、魔女やそれに準ずる反応を探る。

鹿目さん達といっしょに使い魔を狩った公園まで戻ってきたけれど、あの使い魔の分裂元の魔女や他の使い魔を見つけることは出来なかった。

「はあ………」

手の上のソウルジエムを指輪に戻し、一応公園を眺め

「分かってるの……あなたは無関係な一般人を危険に巻き込んで  
いる」

暁美さんに背後から声を掛けられた。

振り返り、暁美さんを視界に納める。

「彼女たちはキュウベえに選ばれたから、もう無関係じゃない…  
でも、危険に巻き込んでいたのは認めるわ」

「……それが分かっていて、何故彼女たちを連れているの？」

さっきの衛宮さんや美樹さんとの会話が無ければ、また私は勘違  
いしたままだったのでしょうね。

「一人ぼっちが嫌だったから……ついさっき気が付いたのだけ  
ね」

「……どういう事？」

暁美さんの視線が少し強くなった気がする。

それもそうよね……大事な子を、私の自分勝手な都合で危険な目  
に合わせていたのだから。

「結局、私は鹿目さん達の為なんて言ってたけど、本当は仲間が  
欲しかっただけなのよ。これじゃあ、美樹さんに偉い顔出来ないわ  
ね」

「……そう」

暁美さんも少し安心したのか、さっきの鋭い視線が元に戻ってる……まだまだ鋭いけどね。

「だから魔女退治見学は次で最後……怪我の一つでもして、鹿目さん達を怖がらせないとだから、力を貸してくれる？ ……衛宮さんは怖がりそうにないけどね」

私の突拍子の無い提案に少しだけだけど、驚いた表情を見せる暁美さん。

彼女はしばし思考してから顔を上げた……鹿目さんを危険にさらす事になるから当然よね。

「分かったわ。でも、これだけは約束して……死なないで」

「！？ ……ええ、分かっているわ。私が死んだら、鹿目さん達が代わりに魔法少女になってしまいかもしれないものね」

多少は私を気遣ってくれたのだろうけど、鹿目さんを中心にしている彼女ならこれが正解でしょう。

ただ、心配なのは、最近の彼女が揺らいでいること。

「……鹿目さんを守りたいのなら、私なんかに気持ちを向けちゃだめよ。最近のあなた、揺らいでいるから」

「……私は揺らいでなんかいないわ」

瞳を揺らし、私に反論している時点で駄目。

最初会った時は、全てを諦めていたような目をしてたわ。

今なら分かる……あなたは、鹿目さん以外の全てを捨てていたの  
でしょう？

「私たちがあなたを受け入れたことで、あなたはいらないものを  
背負おうとしているわ。全てを捨ててもという覚悟が必要なら、  
そんな余分は全てが終わるまで捨てなさい」

厳しく言い聞かせる……これで揺らいだままなら、私はあなたを  
信用できない。

「……感謝するわ、バ マミ」

瞳から揺らぎが消えて、まるで鋼を見ている気分になる。

いいわ、それでこそ鹿目さんの守護者ね。

でも、その感謝は私にはいらない。

「必要無いわ……私も彼女たちを守るために、貴方を利用して  
るだけだから」

そう、漠然と人を守っていた私にも、絶対守らなきゃいけない子  
たちが出来たのだから。

魔女退治に明け暮れた私には、普通の友達なんて出来るわけがな

い。

出来たとしても、魔法少女としての私を教えるわけにはいかないから、理解者になってもらうことはできないし。

他の魔法少女は自分勝手な子ばかり……ずっと一人で戦って、いつか一人で死ぬのだと漠然と思っていた。

そんな中出会ったのが衛宮さん達。

自分に自信が無いみたいだけど、誰よりも優しい鹿目さん。

お調子者だけど、とっても友達思いな美樹さん。

そして、調子に乗っていた私を思って本気で怒ってくれた、とっても心が強い衛宮さん。

私の理解者にして……大事な大事な私の友達。

「キュウベえ……友人として申し訳ないけど、衛宮さん達は魔法少女にはさせないわ」

## 第五章 守るべきもの (後書き)

なぜか、ママさんたちの邂逅が、戦士たちの邂逅に……。自分でも今後の展開が予想できなくなってきたいて、やりたかったことができるかどうか不安になっています。ただ、キャラが勝手に動くのは小説書きの醍醐味だと思っているので、書いて楽しいですw

## 第六章 戦いの恐怖 (前書き)

レポートめんどくせえ……。

ある程度片づけたので執筆しました。

最後あたり眠かったので、少し変かもしれませんが。

## 第六章 戦いの恐怖

ベルが鳴り、エレベーターからさやかが降りてくる。

溜息を吐いているようだが、先ほど上に行ったばかりなのにすぐ戻ってきたということは会えなかったか。

「や、お待たせ」

「あれ……上条君、会えなかったの？」

「診察中か何かだったのか？」

私たちの言葉に、また溜息を吐くさやか。

「なんか都合悪いとしか聞いてないから分かんないけど、多分そうかも」

「あー、間が悪かったね」

「そうだな……せっかく来たのだから、しばらく待ってみればどうだ？」

魔法少女になってまで怪我を治してあげたいと考えたほど、さやかは上条の事が好きなようだしな。

友人の恋愛は応援してやりたいものだ……それに、今回分の魔女退治についてこない事で、少しはさやかの身の安全が確保できるからな。

「でも、マミさんと約束もあるし……」

「それは私たちから言うておくから、さやかちゃんは上条君に会うといいよ」

「ああ、あえる時に会っておけ……好きなんだろう？」

赤くなって俯くさやか……どうやら正解のようだ。

実を言うと、朴念仁や鈍感などと酷く言われていた記憶だけは残っていたので、こづいづ感性には少し自身が無かった。

ここで首を傾げられたりしたら、完全に自分を信用できなくなっていただろう……恋愛面で。

「……じゃあ、そうする」

「素直で宜しい」

生温かい目を背に、赤くなったままエレベーターへ戻るさやかへ、すまないとだけ思っておく。

謝った理由だが、周囲の人々にも会話が聞こえていたらしく、皆微笑ましい顔をしているのだ……先ほどの生温かい目はこの人たちの物だ。

「あはは……行こっか、志保ちゃん」

「ああ、そうしゅっ」

まどかと共に病院から出る。

「待ち合わせまで時間があるし、どこかで暇を潰すか？」

「うん、そうだね」

暇をつぶすために、中心街へと足を向ける。

「ん……？」

「え……？」

ふと、何か気になるものを見つける。

まどかも同じものに気が付いたようだが……あれは……！？

「グリーンシードだ！ 孵化しかかってる！」

「嘘……なんでこんなところに！」

ここで魔女が孵化した場合……結界にさやかが巻き込まれかねない！

周囲を探すが、間が悪く曉美がない。

「……まどかはマミか暁美に連絡を！ 私はさやかのところへ向かう！」

「えっ！？ あ……私マミさんとほむらちゃんの携帯知らないよ

!？」

まどかの言葉に、私の携帯を渡す。

「メモリに入っているから、それで連絡を！ 後は、結界に巻き込まれないように出来るだけ離れる！ ついて来いキュウベえ！」

「え、あ、志保ちゃん!？」

まどかの腕の中から飛び出してきたキュウベえを従え、駆ける。

周囲の人々が何事かと見てくるが無視し、丁度降りてきたエレベーターをすぐに閉め、さやかの元へ向かう。

上条の病室のある階へ着き、さやかを探して発見する。

「さやか!」

「志保……? どうし」

さやかの元へとたどり着くと同時に、結界に取り込まれる。

「どうにか間にあっただか……」

「これって……魔女!？」

驚愕するさやかを引っ張り、物陰へと隠れる。

「何す……」

「静かに、使い魔だ」

目玉に手足が生えたような使い魔が、先ほどまで居た場所を通り過ぎる。

私たちに気付くことなく、その使い魔はどこかへと消える。

強化されていないのでは焼け石に水かもしれないが、袋から干将莫耶（模擬刀）を出しておく。

「……ふう。しかし、どうしたものか」

「願い事さえ決めてくれれば、この場で魔法少女にしてあげるともできるんだけど」

「……あたしはまだ遠慮しておくよ。いざとなったら頼むかもしれないけど」

そう言う場面は来ないで欲しいものだが……万が一を考えるならば、ここで契約を結ぶべきか？

「志保は契約するかい？」

「私は」

『衛宮さん、美樹さん、キュウベえ、聞こえる？』

『みんな大丈夫！？』

聞こえてきたテレパシーに、聞きかけた口を閉じる。

「 どうやら、まだ必要は無いようだ」

「 そうかい……残念だよ」

やはり、何らかの願いを考えておくべきか……魔法少女になることとのデメリットを消せるかどうかが問題だな。

あまり信用ならない小動物を見て、デメリットを聞きだせそうか  
思考する。

いや……暁美から聞きだす方が正確か？

『 衛宮 志保、美樹 さやか……すぐに行くから、安易に契約しない事』

『 ほむらも来てたの！？』

『 了解している……だから急いでに来てくれると助かる』

暁美もいるのか、これは心強い。

『 あまり魔力を使用しない方がいいね。おそらく、完全に孵化してはいないから、余計な刺激は少ない方がいい』

『 分かったわキュウベえ。あと……鹿目さんはここで待つてなさい。急いで行くから合わせてもらえないの……ごめんなさいね』

『 ううん、大丈夫ですマミさん。それより、志保ちゃんとさやかちゃんをお願いします。ほむらちゃんもお願い』

『……………任されたわ』

おそらく暁美は頼られて嬉しいだろうなと思いつつ、私たちは救援を待つ。

「ん、来たようだ」

「ふぁー……………助かったー」

私の視線の先では、マミと暁美の姿が近づいてきている。

何度か使い魔が通り過ぎ、そのたびに背筋が冷えたので、その姿に安堵を覚えるのも当然だ。

「マミ、暁美、ここだ……………っ!？」

「二人とも無事でよかった……………」

勢いそのまま抱きついてきたマミを、なんとか受け止めることに成功した。

「ああ……………私たちは無事だよマミ」

「よかった……………本当に良かった」

マミが感極まったようで、泣いてしまう。

「マ、マミちゃん？」

「っ……すん……」

「ふう……」

マミの背中に手を回し、宥めるように背中を一定間隔で叩く。

私たちは黙り、マミの睨り泣く音だけが結界内に響く。

しばらくそうしていると、泣きやんだマミが身を起こして指で涙を拭う。

「っ……みつともないところを見せちゃったわね」

「そんな事は無い……それだけ私たちを心配してくれていたのだろっ？」

見当はずれな言葉を正し、取り出したハンカチで優しくマミの涙を拭ってやる。

「ありがとうございます」

「いや、この程度の事はしてやらないとな」

涙を拭き終わり、いまだ目は赤いもののマミが微笑む。

「……そろそろ、行くわよ」

「ええ、手間をかけたわ」

暁美の催促に、毅然とした表情で答えるマミ。

それにしても、泣きだすほど私たちが大切な存在になっていたのか。

両親を事故で亡くし、ずっと一人で魔法少女なんてものをやってきていたのだから当然か。

「マミ、強化を頼む」

「……分かったわ。でも、前には出ないでちょうだいね」

大分心配させてしまったようだ。

「ああ、分かっている」

「ならいいけど……」

体が軽くなり、干将莫耶に刃が付く。

「……いくわ」

「ええ」

「ああ」

「うん」

暁美とマミを先頭に、さやかを間に挟んで私が後ろを守る。

その陣形を保ち、隠れながら進む。

「段々と使い魔の動きが慌ただしくなってきたわね」

「おそらく魔女が孵化しようとしているんだ」

マミの問いに、さやかの腕の中にいたキュウベえが答える。

そして、たどり着いた広間で、大量の使い魔が動き出した。

「……来た！」

「衛宮さん達には、触れさせないわ！」

暁美は盾から機関銃を取り出し掃射、マミも大量の銃を周囲に配置し、次々と撃ち続ける。

私もさやかを背に周囲を警戒しているが、マミと暁美は敵を一切討ち漏らさないので仕事は無い。

side  
マミ

次々とやってくる使い魔を、正確に撃ち続ける。

思考は冷静に使い魔を狙い続けるけど、心は今までになく熱く燃え上がっている。

後ろへ振り向き、衛宮さんに向かった使い魔を撃ち抜く。

さやかさんを守るその後ろ姿に、さらに私の心が滾る。

鹿目さんからの電話で、衛宮さん達が結界に取り込まれたかもしれないと聞いた時には足元が無くなったかのような恐怖を感じただけだ

「ここは、絶対に、通さないわ、諦めて、消えなさい！」

守るべき人たちがいるというだけで、今までにないほど体が軽くなる。

「これで終わった？」

「おそらくね」

そうは言いつつも警戒は解かない。

油断で大切な人を失う気は無いから……それに、衛宮さんに散々怒られた事ですものね。

皆で警戒して進んで、おそらく結界の主の部屋　魔法の住処の扉へとたどり着く。

「暁美さんは私の援護と、二人の護衛をお願い」

「……分かったわ」

少し悩んだみただけけれど、頷いてくれた。

鹿目さんは安全な所にいるから、二人を見捨てることは無いでしょう。よし安心ね。

これから危険だけど、苦戦して怪我でも負わなければいけない。

さやかさんに戦いへの恐怖を教えて、この件から鹿目さんともども離れて貰いたい。

衛宮さんは何故か戦い慣れているから効果は無いだろうけど……それはおいおい考えていきましょう。

扉を開けて中へと侵入して、魔女の気配を辿って視線を向ける。

そこには、使い魔と間違えかねない、ぬいぐるみみたいな魔女がいた。

「あれが、この結界の魔女？」

「凄く弱そうだねマミさん」

「美樹 さやか、あれでも魔女よ。不用意な発言はやめなさい」

「そうだな……今のさやかには関係ないが、見た目だけで判断すると足を掬われるぞ」

確かにさやかさんの言うとおり弱そうではあるけど、見た目から

強さが分からないというのは厄介すぎる。

今回、わざと苦戦するのは難しいかもしれないわね。

でもやらなければならぬ……最悪、私の命を

「何を考えているのよ私……」

つい呟いてしまうほど、馬鹿な事を考えたわ。

私が死ねば、確実に誰か……多分、衛宮さんが魔法少女になってしまう。

暁美さんがいるから大丈夫かもしれないけれど、最近のこの町は魔女の出現数が多すぎるから遅らせる程度にしかない。

だから、私は絶対に死ねないわ。

「暁美さん、合わせてくれる？」

「大丈夫よ」

頼もしい仲間もいる……なら、このくらいの死線を潜り抜けられないでどうするの！

「行くわよ！」

掛け声とともに、私達は魔女へと戦いを挑んだ。

side out

「行くわよ！」

マミが駆け、先制の一撃を魔女へと撃ちこみ 命中。

衝撃で椅子から吹き飛ばされ、暁美とマミの銃撃の雨に晒される  
魔女。

そして、以前のようにマミの創った弾痕から、紐が出現して魔女  
を縛り上げる。

「何か隠し玉があるかもしれないけど……とどめ！」

マミは手に持っていた銃を大砲に変え、いつもの決め技を放つ。

「ティロ・ファイナーレ！」

大砲が魔女を撃ち抜き……口から巨大な何かが飛び出してきた。

そして、大口を開き

「避けなさい！」

「マミー!?!」

「マミさん!?!」

「大丈夫よ!」

その口が閉じる寸前に、奴の正面からマミが逃げる。

だが、体制を崩していて、未だ危険なのは変わらない。

「伏せなさい!」

暁美の声と共に、マミが回避と同時に伏せる。

マミとの間に魔女を挟むように、手榴弾が出現する。

炸裂し爆音が響き渡るが、爆煙の中で魔女が動いているのを確認する。

そして、脱皮するようにまた口から飛び出し

「マミ、まだ動いているぞ」

「っっっい!」

間一髪、無傷な魔女の体が、先ほどまでマミがいたところを通り過ぎる。

「巴 マミ、っっっいつは私がどうにかするから、あなたは自分の仕事をしなさい!」

直後、マミの前に暁美が出現する……空間転移か？

そう考えた瞬間、体を動かして後ろへ右手の莫耶を振るう。

「ち、まだ残っていたか」

やってきた使い魔を始末し続けるうちに、マミの銃撃が使い魔を掃討した。

「二人とも大丈夫！？」

「だ、大丈夫です」

「なんとかかな……それより暁美は？」

周囲を警戒しつつ暁美の方を見ると、終始暁美が魔女を翻弄していた。

暁美に食らいつこうとするのだが、食べたと思った瞬間には別の場所にいる。

そして、何かに気が付いたように視線が固定されたので、私も視線を辿る。

そこには、魔女の最初の形態と似たようなぬいぐるみが出て……そうか、あれが本体、もしくは本体を補完している存在なのか。

「マミ、あそこの使い魔を撃てるか？」

「そういう事……任せて」

マミが銃を構え、呼吸を止めて銃弾を放つ。

それは狙いたがわず使い魔を撃ち抜き、消滅させた。

そして、次に暁美が消えた後、魔女は盛大に爆発して消滅した。

少しして、結界が完全に消滅。

私たちは、グリーンフィールドのあった病院の駐輪場へと現れた。

「皆、怪我は無かった!？」

外で待っていたまどかが駆け寄り、皆の心配をする。

「……はあ、今日の魔女は強敵だったわね」

「ええ、厄介な相手よ」

「マミの相性が悪かったのもあるが、確かに厄介だった」

マミは銃の魔法を扱うが、近距離で大きい威力が出せないために、奴を引き離すのが難しかった。

暁美がいなければ、どう転んでいたか分からない。

「……マミさんは、なんで平気なの？」

「さ、さやかちゃん？」

「……」

さやかが震えを抑えるように、自分を抱きしめる。

「あの時、少し間違えたら、絶対マミさん死んじゃってたのに、どうしてそんなに平気なの!？」

「……慣れちゃったのよ。一回事故で死にかけて、新人の頃にも死にかけて……最近はめつきりなくて忘れてたけどね」

さやかは俯き、呼吸を荒げている。

「ごめんなさいマミさん……あたしには魔法少女出来そうにないや」

「いいのよ、そう思うのが当然。私に全部任せて、美樹さん達は普通の生活に戻りなさい」

マミは泣きだしたさやかを抱きしめ、私がマミにしたようにさやかをあやす。

「鹿目さん、こんなに引つ張り廻して無責任だと思つてしょうけど、魔法少女になるのは止めておきなさい」

「マ、マミさん?」

ふと微笑んで、まどかも招き寄せるマミ。

「あなた達は一杯幸せな未来があるの。無理に願いを叶えてもらう必要なんてない……だから、普通の幸せを普通に感じなさい」

「でも、マミさん……」

さやかをあやしなから、まどかも抱きしめるマミ。

「前に皆で話したでしょう……人の為にといいものを勘違いしてはいけないって。あなたは私たちに罪悪感を感じる必要は無いのよ」

「巴 マミの言う通りよ、鹿目 まどか。あなたはこんなことに首を突っ込むべき人ではないわ……あなたは、大切な人たちと笑い合っているのが正しい在り方」

「……ごめんなさいマミさん、ほむらちゃん。すぐに答え出せないです」

「まどかはいいい子だから仕方が無い。だが、私も二人の言うとおり、まどかには普通の幸せを感じて欲しい」

「……まどか。魔女は本当に怖かった……子供の落書きみたいな奴だったのに、マミさんが危なくなつて……それで……」

みんなしてまどかを説得する。

今回の戦闘をその目で見なかったため、中々諦めてくれない。

「……一晩だけ、考えさせて下さい。きっぱり諦めるか、マミさん達のお手伝いをするのか、考えて気まず」

「分かったわ……よく考えてきてね」

そう言って、マミは二人を離した。

そのまま振り返ったマミの表情は、強い決意に彩られていたのであった。

## 第六章 戦いの恐怖 (後書き)

マミさん生……存!!

そこまで苦戦した気もしないけど、苦戦したことにしてください…

… 毎度言っけど、戦闘描写難しすぎ。

そして、さやか心が完璧に折れました。

これでさやかは人魚にならないでしょうし、原作ENDになっても円環の理に消えることもないでしょう。

第七章 少女たちの思い (前書き)

少し長引きましたが、第七章上げます。

それにしても、志保以外の地の文が難しい。

特徴つけようと頑張るけど、みんな似たり寄ったり……特にほむほむ難しすぎる。

## 第七章 少女たちの思い

side さやか

夕日に照らされて、エレベーターが昇る。

思いだすのはついさっきの事。

魔女が大口を開いて、マミさんを食べようとしたその瞬間。

「……っ!？」

その瞬間を思い出すだけで、背筋が震えて体が強ばる。

ぎりぎり避けてマミさんは助かったけど、一歩間違えばマミさんは死んでた。

出来るなら、マミさんの活躍に浮かれていたあたしを殴りつけてやりたい。

これはアニメやゲームじゃない、現実の……命の取り合いなんだって。

ガコン

エレベーターから降りて、恭介の病室へ歩く。

「……あたし、何しに行こうとしてるんだろ」

恭介が無事なのか確かめるため？

それとも、恭介に慰めてもらうため？

正解は両方。

でも結局は

「 2：8つてところか。ホント……最低だなあたし」

あんな怖い事をママさんだけに押し付けて、勝手に傷ついて。

それで自分は人に慰めて貰おうとしてるんだから……本当に救えない奴だ。

「……あ」

そんな事を考えているうちに、上条 恭介というプレートがかかった病室に着く。

扉に手を掛けて……その手が止まる。

下らないプライドか何かがこの手を止めているのだろうか……中途半端だなあたし。

慰めて貰いたいなら慰めて貰えばいいのに、変な意地張っちゃって……。

「あら、上条君のお見舞い？」

「あ……ええ」

看護婦さんに話しかけられる。

「ごめんなさいね。診察の予定が繰り上がって、今、丁度リハビリ室なの」

「ああ、そうでしたか、どうも」

扉から手を離し、来た道に戻る。

結局あそこで中に入っても、慰めて貰うどころか、恭介に会うことすらできなかつたんだ。

「あたしって間が悪いなあ……」

何をしても中途半端で終わる……せめて、マミさんやほむら、それと志保みたいに、何かをやり遂げようとする人になりたい。

「まどか……あんたも、そう思ってるのかな？」

優しく可愛らしいけど、実は芯の強い親友を思う。

その芯の強さが、悲劇につながる事を祈りながら。

「はあ……どうしたらいいんだろう？」

一晩だけ考えさせてと言ったけど、全然何も浮かばない。

ベッドの上でぐるりと回って、うつ伏せに頭を抱えてもどうしようもない。

そもそも今日は、魔法少女になってマミさんを手伝おうって決めていたんだけどな。

マミさんには止めておきなさいって言われちゃったし。

「あんなさやかちゃん、初めて見たな……」

息を乱して、怯えるように……うつん、実際怯えてたさやかちゃん。

いつも元気な笑顔を見せてくれて、遠慮しがちな私を引っ張ってくれる……そんな姿からは想像できない姿だった。

「マミさんも危なかったんだよね……」

さやかちゃんが怖がってるのを見て、私も少し怖くなっちゃった。

けれど、実際にその時を見たわけじゃないから、いまいち実感が無いんだよね。

むしろ、そんなに危ないならマミさんを助けてあげたいと思う……

…思っただけど

『あなた達は一杯幸せな未来があるの。無理に願いを叶えてもらう必要なんてない……だから、普通の幸せを普通に感じなさい』

『巴 マミの言う通りよ、鹿目 まどか。あなたはこんなことに首を突っ込むべき人ではないわ……あなたは、大切な人たちと笑い合っているのが正しい在り方』

『まどかはいいい子だから仕方が無い。だが、私も二人の言うとおり、まどかには普通の幸せを感じて欲しい』

皆、私の為に言ってくれている。

それだけ、魔法少女になるということが危険な事なんだろうと思う。

でもやっぱり、マミさん達を手伝ってあげたい。

「はあ………どうしたらいいんだろう？」

こうしている間にも時間が流れていくのに、私は全然答えを出せないまま。

「私ってやっぱり駄目だなあ………」

たいした取り柄も何のに、その上優柔不断なんて………はあ。

ずっと同じことをぐるぐる考え続けて、頭が痛くなって来ちゃった。

「何か飲んでしょ……」

あと、ママが起きてたら、相談に乗ってもらおうかな。

ベッドから降りて、部屋を出る。

「ん……眠れないのかい？」

「ちよつと考え事があつて……」

そう答えると、ママは冷蔵庫からジュースを持ってきてくれた。

氷の入ったグラスに、ジュースが注がれる。

私がジュースに口をつけたのを見計らつて、ママが口を開く。

「それで、まどかは何を悩んでいるんだい？」

「あのね……誰かがやらなきゃいけない事があるんだけど、とっても辛い事なの」

誰かが魔女を倒さないといけないけど、それはとても大変な事。

「それを先輩がやってるんだけど、私も手伝いたいと思ってたんだ」

「うん、それで？」

前までの悩みはここで終わってたけど、ここからが今の悩み。

「それで、私もなるうとしてたんだけど……先輩たちが、本当に辛いから止めなさいって言うの」

「そう言われて、どうしたらいいのかわからないんだ？」

ママの言葉に頷く。

そうしたら、ママは微笑んで言う。

「なら、簡単な事さ……手伝ってあげればいい」

「え、ええっ!？」

あんまりにも簡単にママが言うから、びっくりしちゃった。

でも、ママがそんなに無責任な事を言うはずないから、続きの言葉を待つ。

「どういう事をやっているのかわからないけど、直接それを行わなくても、環境を整えるとか手伝う方法を考えればいいんじゃないかな？」

「あ……」

やっぱりママは凄いや……私は魔法少女になるか、そのことから離れるかしか考えてなかったのに、違う答えをポンと出してくれるなんて。

はあ、私もママみたいになりたいなあ。

「その様子だと悩みは解決したかな？」

「うん！　ありがとうママ」

魔法少女として、毎日大変なママさんやほむらちゃん。

特に、ほむらちゃんは辛いことばっかりあって、感情を出せなくなっているのかもしれない。

だから、ママさんやほむらちゃんの普通の女の子の部分を、普通の女の子の私は護るんだ。

怖いことから逃げているだけかもしれないけど、ただ離れて何もしないよりはいい。

そうして、いつかほむらちゃんも笑えるようになって……私にさやかちゃん、志保ちゃんにママさんとほむらちゃん……あと仁美ちゃんも一緒に、皆で笑ってられるとどんなに素敵だろうって思う。

そんなわくわくした気分で布団に入ったらなかなか眠れなかったけど、どうにか眠ることができました。

s i d e  
ママ

今日の探索を終えて、家に帰ってくる。

結局、あの後倒せたのは使い魔が一体だけ。

こここのところ異常にいる癖に、中々出てこないものね。

ただ、使い魔一匹でも目的は達せられたから、とりあえずはよかった。

「死にかけるのって、やっぱり慣れるものじゃないわね」

美樹さんには心配させないようにああ言ったけど、本当は怖くて震えそうだった。

だから、魔女退治に行くことで、恐怖を抑えてちゃんと戦えるように覚悟を決め直してきた。

使い魔に衛宮さん達が襲われる姿を想像することで、残っていた恐怖を振り切った。

今でもあの時のように死にたくないのは変わらない……でも、ただ漠然と生きたい訳でもない。

ただ戦い続けて一人で生きるよりも、戦いから帰ってきた日常で大切な人たちに迎えて貰える……それがどれだけ嬉しい事か知っているから。

衛宮さん達の為なら命は惜しくない……彼女たちを失ったら、私はただの抜け殻になってしまうでしょうから。

「皆は私が必ず」

守ってみせるから。

ソウルジエムを抱きしめ、そう誓った。

s i d e ほむら

椅子に座り、現状を纏める。

「今の状況は、かつて無いほどに好転している……」

まどか以外の全てを諦めてから、毎回敵対するしかなかった巴  
マミと協力関係を結べている。

私はまどかを、巴 マミはまどかに美樹 さやか、衛宮 志保を  
守るため。

そう言う利害関係で繋がっているとはいえ、彼女のまどかへの影  
響力の大きさを考えるとこれは大きい。

そして、巴 マミもその目的の為に、まどか達を魔法少女になら  
ないように行動し始めている。

美樹 さやかに、魔法少女になることの危険性を知らしめること  
に成功した。

まだ予断は許さないとはいえ、見滝原の魔法少女が破滅する原因になりやすい美樹 さやかを躊躇させられるだけでも大きい。

それに、巴 マミが言っていた

「前に皆で話したでしょう……人の為にというのは勘違いしてはいけないって。あなたは私たちに罪悪感を感じる必要は無いのよ」

この言葉。

この中の「人の為にというのは勘違いしてはいけない」、そういう内容の会話をしたたろう事も、上条 恭介の為に魔法少女になる美樹 さやかを躊躇させるでしょう。

友人である美樹 さやかも魔法少女になるのを躊躇うのなら、まどかもなる確率は低くなるはず。

気をつけるのは、まどかが誰かを助けようと動く事。

優しすぎるまどかは、誰かの命がかかったならば契約してしまいかねない。

だから、最低でもまどかと親しい人をも守る必要があるわね。

「美樹 さやかは様子を見て対応すればいいとして……残る問題は佐倉 杏子にワルプルギスの夜、そして……衛宮 志保」

佐倉 杏子は偽悪的だけど、本質的には周囲を思う人間。

上手く立ち回れば、仲間にすることは簡単でしょう。

そして、ワルブルギスの夜。

これには出来る限りの武装とグリーンフシードを集め、バ マミと佐倉 杏子の協力を得て戦うしかない。

最後に衛宮 志保のだけど。

「イレギュラー……衛宮 志保のおかげで、これらが今まで上手く回っている」

衛宮 志保自体も、私にとって好ましい存在。

何故か硝煙の匂いや戦いを知っている……だけど、その在り方は人を守ることを主としているように思える。

そして、思慮深い。

衛宮 志保だけはキュウベえに対して警戒の目を向けている。

かつての私と同じような目だったから、なんとか分かることかできた。

感情が理解できないインキュベーターでは、その警戒には気が付かないわね。

また、魔法少女にも疑念を持っているだろうことも分かる。

衛宮 志保は剣を取り戦っているのに、何故か魔法少女にはなっ

ていない。

普通なら、魔法少女になった方が効率がいいはず……だけど、それをしないということは魔法少女という存在に疑念を持っているからだと考えられる。

「衛宮 志保になら、魔法少女の秘密を教えてもいいかもしれないわね」

衛宮 志保ならその情報の重要性和扱い方を理解できるでしょう。

どうにか彼女と単独で接触出来れば……。

その手段を考えながら、私の夜は過ぎていった。

第七章 少女たちの思い (後書き)

今回はまどかたちの思いを書かせてもらいました……志保はお休みですが。

まどかのところを一番悩んだ気がします。

まどかの考えかたしだいで、これからが決まると言っても過言ではないですからね。

どうにか、魔法少女にならず、それでいて離れすぎないだろうポジションになる、まどからしい考えがでてきました。

そろそろ、杏子登場をどうにか考えなければ。

一応、そのための伏線はあるけど、無理が無いようにしなければいけませんからね。

## 第八章 答えと恋路へ厄介事

(前書き)

すいません、超遅れました。

オリジナルIF入って中々筆が進まないのもあるのですが、リアルで中々書き始めなかった自分の不徳のせいです、すいません。しかもクオリティ落ちてる気がするし……重ね重ねすいません。

## 第八章 答えと恋路へ厄介事

いつも通りに家を出て、いつも通りの場所で友人を待つ。

だが、自分でも分かるくらい、今の私は落ち着きが無い。

友人たちが来る方角を頻繁に確認しながら、そのたびに溜息を吐いている。

原因は昨日の魔女退治だ。

ママが死にかけ、さやかがそれに酷いショックを受けたのは昨日の事。

それによってまどかが魔法少女にならないように言われ、答えを出してくる日が今日。

ママも死にかけることに慣れたなどと言っていたが、それも怪しいものだ。

さやかとママの心に、まどかの答え。

これだけ心配事があるのだから、溜息が出るのも仕方あるまい。

そんなふうには頭を悩ませていると、その原因の一人がやってくる。

「おっはよー志保ー!」

いつも通りの元気な声だが、昨日の姿を見た者としては空元気で無いかと心配になる。

「あー志保？ 一晩経って落ちついたから、そんなに仏頂面しなくてもいいよ？」

「おはようさやか。一応元気そうで何よりだが……詳しくは皆で集まった時に」

話を切り、新たにこちらへ向かってくる友人を迎える。

「おはようございます、志保さん、さやかさん」

「ああ、おはよう仁美」

「おはよー仁美」

さて、後はまどかなのだが……来たか。

「おはよう皆。ごめんね、待たせちゃった？」

「待った待ったー」

「こら、さやかもさっき来たばかりだろうが」

「そんな事ばかり言っていると、狼少年になってしまいますよ、さやかさん」

どっと笑う私たち。

まどかも笑っているが、その目にはわずかに隈が見える。

大方、悩み過ぎて遅くまで起きていたのだろう。

だが、傍にいるキュウベえが余計な事を言っていないかが心配だ。

『さやかちゃん、大丈夫？』

『あー、一応落ちついたわ……心配掛けてごめん』

昨日の姿を見た側としては、不自然に明るいさやか。

そんなさやかを心配したまどかに、さやかも普通に返す。

ただ、さやかは大丈夫とは言っているが、普通の女の子が感じるべきでない恐怖を知ったのだ……ケアをする必要があるだろう。

『無理はしないようにな』

『うん、頼りにならないかもしれないけど、辛かったら相談してね？』

『うん、ありがとう二人とも』

いつもより儂げながらも、偽りない本心からの笑みを浮かべてくれたのだった。

昼休み、私たちは屋上へと集まっていた。

私、まどか、さやか、の三人でベンチに座り、キュウベえは離れた場所で日差しを浴びながら丸くなっている。

「皆、お待たせ……… 暁美さんは？」

そう言っ、やってきたママもベンチに座る。

「暁美は結果だけ教えてくれと言っ、来ていない」

「そう……… 仲間っ、ていうものに慣れていないのかもしれないわね」

「そうなのかな？」

「あー、ほむらっ、て一匹狼っ、て感じだからそうかも？」

さやかの言葉に皆で納得し、この話題を終える。

そして、ママがさやかへ心配そうに言葉をかける。

「それで……… 美樹さん、大丈夫？」

「えっ、と、はい。一応、落ちついたらつもりです……… トraumam物でしたけどねー！」

若干引き攣っ、てはいるものの笑みを浮かべ、ブラックジョーク？を言える程度には持ち直したようだ。

仁美が暴走するのにもかかわらず、休み時間中に二人きりで話をした甲斐もあつたな。

その様子を見たマミが動く。

「うえ!？」

「……」

マミはさやか顔を抑えると、どんな変化も見逃すものかと言った視線でさやかを見る。

「大丈夫みたいね。はあ……よかった」

「……マミさん」

心労で溜まった淀みを溜息で吐き出し、柔らかい笑みを浮かべるマミ。

それを見てさやかは、少し離れて私たちに向き直る。

凜とした表情を浮かべて、大きく息を吸ったさやかは、勢いよく礼をする。

「皆……ご心配おかけしました!」

「「「「「」」」」」

今の私たちの顔は傑作だろう……揃って呆けた間抜け顔だろうか  
らな。



マミの言葉に、私たちは真面目な表情に戻る。

まだまださやかをからかいたかったが、仕方が無い。

「さて、そう言う訳で……だ、昨日の答えを聞かせて貰えないだろうか？」

「うんっ！」

気合を入れて頷くまどか。

そして出てきた答えは

「私は、マミさんのお手伝いをしたいです！」

私たちにとって、選んで欲しくない答えだった。

まどかの言葉に呆然としてみると、キュウベえが喰いついてくる。

「まどか、それは魔法少女になるってことかい？」

「あ、そういうことじゃないんだキュウベえ」

どういう……ああ、そう言う事か。

何も、魔法少女になることだけが、手伝うということではないのだからな。

「えっと、魔法少女にはならないんですけど……マミさんやほむ

らちゃん、『日常』を、普通の女の子として守っていけたらなあ……  
…つて。えつと、駄目ですか？」

「っ……鹿目さん！」

感極まって抱き付いたマミに、「うひゃう！」と可愛らしい悲鳴を上げるまどか。

隣ではさやかが安堵で胸を撫でおろし、屋上の入り口に隠れている暁美も喜んでいるだろう。

「そうかい、残念だよ……魔法少女になりたくなったら、いつでも僕に願いを言っつてね」

「ごめんねキュウベえ」

キュウベえはあっさり引き下がったが、未だ諦めていないようだ。

きっかけを見つければ次第、勧誘を行うだろう……厄介な。

「……っ!？」

キュウベえをどうするかを考えようとしたところで、私は手の中に現れた感触に驚愕する。

どうにか表情や態度に出さない事に成功したが、手の中にあるのは……紙か？

出来るだけ自然に手を上げ、紙を見る。

そこには『二人だけで話がしたい』とだけ書かれていた。

それを確認して手を降ろすと、紙は手の内から消失していた。

暁美の能力に関してはある程度の想像はしていたため、今度は驚くことなく受け入れた。

「ん……そろそろ時間だな。続きは放課後にしよう」

その能力からふと連想し時計を確認すると、昼休みが終わりそうだったので皆に告げた。

「あらそうね。それじゃあ、教室に戻りましょうか」

「「はい！」」

皆はにこやかに、私は表面だけにこやかに教室へと戻った。

授業中、私は屋上での紙の内容について思考していた。

暁美から『二人だけで話をしたい』という紙を渡された。

私もそうして暁美から情報を貰いたいのだが、さやかがまだ危ういため、離れるのを躊躇してしまう。

今回の事で、さやかは墮ちる時は一気に落ちてしまふことが分かった。

普通の少女なら、現実逃避してじわじわと弱っていくのだろうが、さやかは素直に受け止めすぎて一度に負担を受け過ぎている。

逆に、元に戻るのも早いのだが、戻れないところまで墮ちてしまつたらどうしようもない。

そして、そうなりかねない要素が二つある。

上条 恭介とキュウベえ。

上条 恭介だけならば、上条とさやかの自殺に気を付けていれば問題ないだろう。

キュウベえだけならば、今回の恐怖で魔法少女になることは無いだろう。

だが、妙なところで思い切りのあるさやかに、この二つの要素を加えると……推して測るべしだ。

上条が少し自暴自棄になるだけで、容易くさやかは魔法少女になるだろう。

以前に人の為とは……なんて説いたが、理性だけで感情を抑えきれないのは私自身よく理解している……衛宮士郎なぞ、その最たる例だからな。

つまり、さやかを魔法少女から遠ざけるには、今ある楔では心もとないのだ。

これをどうにかしなければいけないのだが……正直、色恋沙汰なんてものは私の最も苦手とするところ。

今はさやかに付いて回るしかないか……？

戦い以上に難解な問いに、私の頭は痛みを溜めこむのであった。

「それでは、さようならですわ」

「ああ、さようなら仁美」

「ばいばい、仁美ちゃん」

「お稽古、がんばってこーい」

放課後、習い事に向かう仁美を見送り、マミとの合流場所へ向かう。

「お待たせしましたマミさん」

「お待たせされました。それじゃあ、行きましょつか」

授業中にテレパシーで予定を決めており、今日はマミの家に行く

ことになってた……はずなのだが。

「その、マミさんごめんなさい！ 私、恭介のところに」

「ああ……昨日の今日だから心配よね。しっかりと元気を分けてあげなさい、美樹さん」

さやかは、上条のところに行くと言っ。

仕方が無いので、私もついて行くことにしよう。

「さやか、今日は私も見舞いに行ってもいいか？」

「へ？ べ、別にいいけど……」

私の発言に戸惑うさやか。

そして、マミは私の言葉で真剣な表情を見せる。

視線を交わし、私が心配している事を理解しただろうマミに頷く。

マミもまどかの手を取って頷いた……まどかは任せるといつことだろう。

「それじゃあ、行きましようか鹿目さん」

「はい！ マミさんー！」

まどかは気合十分にマミへと付いていく。

「それじゃあ、さようなら」

「二人ともさようなら。上条君によろしくね」

「りょーかい、まどか。また明日ね」

「二人とも、また明日」

手を振り、二人と別れた私たちは病院へと向かう。

沈黙のまま歩き続ける私たち。

そして、ぽつりとさやかが口を開く。

「また心配掛けてごめんね、志保」

「……気にするな、私がしたいからしているだけだ」

しばらくの沈黙は、私が付いてくる理由を考えていたらしい。

「本当さ、志保みたいにぶれない女になりたいよ」

「ただ頑固なだけだ。まあ、まどかママのように芯が通った女性になるのは推奨するがね」

かっこいいまどかママを思い出して、二人してくすりと笑う。

「そうになりたいな……難しいけど」

「そういうことは、得てして難しいものだ。大抵は地道な努力がモノを言う」

私の言葉に苦笑いを浮かべるさやか……まあ、あまりそういうことをしていないからな。

「ただ、本当にやりたいことがあるのなら、自然とそういうものは付随するものだ……それがどれだけ困難だろうとな」

「志保……？」

つい私自身の経験を語ってしまったが、私のような特殊な人間の感性が、普通の人間の感性に当てはまるかどうかは怪しいものだ。

少し昔を思い出したところで、私たちは病院に着いたのだった。

## 第八章 答えと恋路へ厄介事

(後書き)

さやか難しいよさやか。

と言うわけで、さやかに苦戦まくっています。

何をどうしても安定のさやか、志保も自分もこの無理ゲーに頭を痛めていますw

説得力があつて、安定にならない進ませ方ないかなあ……。

## 第九章 気が付かれた事実 (前書き)

どうも、長々更新停止していませんでした！

難関を越えて夏休みに入り、バイトだけ気にしてればよくなったので早速執筆しました。今回はほんの少しだけどあんこちゃん登場ですw

## 第九章 気が付かれた事実

コンコン。

「恭介、入るよ?」

そう言っつて、返事も待たずに少し開けた扉から中を覗くさやか。

さすがは幼馴染と行ったところか、何気ないところに気易さを感じる。

これが仁美だったら、返事が来るまで何度かノックをするだろう。

さやかが中に入ったので、私も中に入る。

上条はCDプレーヤーで音楽を聴きながら窓の外を見ている。

そのせいで私たちの訪問に気が付かなかったのか。

そんな事を考えているうちに、さすがに気配に気づいた上条がこつちを見て驚く。

「え、衛宮さん!?!?!?!つて、痛っ!」

私を見た上条は急に体を起こして、痛みに顔を歪める。

慌ててさやかが駆けより、上条の体を支える。

「だ、大丈夫!?!」

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫だよ……いつつ。それより、どうして衛宮さんが？」

なんだか妙に落ち着きが無い上条を疑問に思いつつ、質問に答える。

「さやかに付き合って見舞いに来たんだが……迷惑だったか？」

「べ、別に迷惑なんかじゃないよ。ただ、今まで来たこと無かったから……」

幼馴染でもないクラスメイトが、いつの間にか病室にいればこれくらい慌てるもの……なのか？

上条がよく分からない状態なのでさやかを見てみたのだが……さやかも何故か難しい表情で唸っている。

「まあ、そうとは思えないが良しとしよう。上条も元気そうだと確認できたからな、もう私は外で待たせてもらおう」

「え、もう行くのかい？」

また妙に挙動不審になる上条に、やはり私はいない方がいいかと判断する。

「ああ、あまり親しくない私がいても、上条を疲れさせるだけのようだからな」

「そ、そんな事ないよ！　いつ！」

慌てて動くものだから、また痛んだようだ……やはり私はいない方がいいな。

「はあ……無理せずに、おとなしく寝ている上条。そうして早く学校に戻ってこい」

「あ、衛宮さん……」

上条の声と黙ったままのさやかを背に、私は部屋を出るのだった。

side さやか

「あ、衛宮さん……」

残念そうに志保を見送る恭介に、疑問がほとんど確信になる。

だけど、私にはすぐにそれを聞ける勇気もなくて、そのまま黙ってしまおう。

ボケっとしたままの私と恭介。

恭介の耳から外れたイヤホンから流れるクラシックだけが、部屋

を満たす。

「……よし！」

どうにか覚悟を決めて、恭介に顔を向ける。

「きよ、恭介、き、聞きたいことがあるうんだけど……」

「……へ、う、うん。えっと、聞きたいことって何かな？」

緊張で噛みながらも、どうにか言葉を出す。

「そ、そのさ……恭介って志保の事が好きなの？」

「え………?」

本当に予想外の事を聞かれたかのように首を傾げる恭介……すっごい外したみたいで、とてつもなく恥ずかしいんだけど。

「………あ、ああー、そういうこと」

「ど、どどういう事？」

なんだか一人で納得している恭介に、理由を聞く。

「えーと、なんて言ったらいいのかな……とりあえず、僕は衛宮さんを恋愛とか、そういう俗な目で見てるわけじゃないんだ」

「ぞ、俗？」

恋愛って俗なんだ……あれ、これって失恋確定？

「なんて言えばいいのかな？ 憧れでもないし、尊敬も近いけど違うし……」

憧れ？ 尊敬？

……これは、なんでそう思ったのか聞いた方がいいかも。

「えっと、言葉に表せないなら、なんでそういうふうに志保を見るようになったのか話してほしいんだけど……」

「あ、その方が分かりやすいかもね。多分、僕が言おうとしてたことも分かるだろうし」

私の提案に納得した恭介が、ひとりで頷く。

そして、今もその光景が目には浮かんでいるみたいに、興奮しながらその時の事を話し始める。

「あれは、事故に遭った日の前日の話なんですけど」

事故の前日、CDを探しに町の方へと行っていた恭介。

恭介が歩いていると、公園からボールが飛んできて、それを追った子供も出てきたらしい。

そこまで聞けば予想が付くように、子供が車に轢かれそうになって、次の瞬間に子供は助かったみたい。

「 恥ずかしながら僕は動けなかったんだけど、衛宮さんがその子を捕まえて安全なところまで飛んでたんだ……本当にギリギリのところだね」

「 えっとつまり、それってヒーローに対する憧れみたいなもの？」

自分が助けられなかったものを助ける人。

まるっきりヒーローじゃない……志保にピッタリ過ぎる。

でも、恭介は憧れじゃないって言ってたし……どういう事？

「そこまでならね。そのあとの衛宮さんの表情を見ると、そんな単純には思えなくなるよ」

「志保の表情？」

恭介はその時の事を思い出しながら、それに陶醉したように言葉を続けた。

「子供を助けた衛宮さんはね、笑ってたんだ」

「……え、それだけ？」

事故に遭いそうになって助かれば、誰だって笑ったりすると思うんだけど。

私の思った事を察したのか、恭介は首を横に振りながら続ける。

「あれは安堵の笑みじゃないよさやか……あれは、子供が助かつ

て本当に良かったって笑みだった」

「え……」

何故だか分からないけど、酷い衝撃を受けた。

「あの時の衛宮さんは……そう、聖女とか聖人って言うのがぴったりだったんだ」

衝撃を受けた言葉が頭の中をぐるぐる回って……ようやく、なんで衝撃を受けたのか分かった。

「あ、となると崇拜って言うのが、衛宮さんへの気持ちが一番近いかも」

暢気に志保の事を語る恭介……昔の私だったら、今の恭介のように志保の事を話していたんだろうね。

マミさんが死にかけのを見て、死ぬという事を身近に感じる……となった今なら分かる……志保は異常だった。

今になって思えば、志保は自分の命を蔑にし過ぎている。

例えば、刃物を持った通り魔を素手で捕まえた志保　ふとした拍子にそれが刺さるかもしれないのに、近寄って抑え込んだ。

例えば、魔女退治の時、剣を持って戦った志保　幾らマミさんに強化してもらっていても、魔法少女じゃない志保が戦う様な相手じゃない。

そんな命に関わらない事でも、志保はほとんど無償と言えるような対価で人の為に動いていた。

「人の為についていうのに反対してたくせに……」

「……さやか？」

自分が一番人の為に動いているじゃん……だからこそ、反対したんだろうけどね。

「おーい」

志保のそれは生き方そのものだから変えられないけど、変えられる私は変えておけることかもね。

「さやかー……摘まむよ？」

「わぷっ！？ きよ、恭介、なにするのよ！」

突然恭介に鼻を摘まれて、思考を中止させられた……って、あれ？

私の鼻をつまんでいた恭介の手は、今の恭介の体制からして左手でないといけない。

だけど、恭介の左手は動かないはずで……。

「って、なんで左手動いてるの!？」

「まだ感触も鈍いし、ぎこちないけどね」

そう言いながらも、ゆっくりと左手を開いて握る恭介。

「え、え、えー？」

え、なに、どういう事？

「一度は動く可能性は低いだろって言われたんだけどね、昨日ほんの少し動いてさ、それからリハビリでどうにかね」

なんだかとっても軽い感じで言われる。

いや、嬉しいんだけど……こんな軽く言われると、恭介を治すために魔法少女になるかならないかを悩んだ時間を返せと言いたくなっちゃう。

「事故の前日に衛宮さんの動きを見れたのがよかったみたいでさ、それで心構えも出来て、わずかながらもいい体制に出来たんだ」

嬉しそうに言う恭介の姿に、パニックで回っていた変な思考が止まって、段々真っ当に言葉を受け入れることができ……いつの間にか、私は恭介に抱きついていていた。

「い、いだだだだだだだ！」

「あ、ご、ごめん恭介！」

まあ、痛いってのは生きてることだから、許して。

『い、いだだだだだ！』

『あ、ご、ごめん恭介！』

病室の中から聞こえてくる声に呆れながらも、さやかはもう大丈夫だろうと判断して部屋の前から離れる。

「それにしても、まさかさやかに気付かれるとは……」

私のことについて話していた最中にさやかが黙ったのは、おそらく私の異常性に気が付いたからだろう。

そういうことに鋭いであろう、ママや暁美ですら気付いていないのに、さやかが一番に気が付くとは思わなかった。

非日常に関わっている以上、いつかは気が付かれる事とは言え……余計な心配をかけてしまうな。

これがママに伝わると、魔女退治に同行できない可能性が高くなるな……いや、戦力的にはあまり役に立たないから問題ないか？

「ふう……やはり、自分だけでどうにかしようと考えてる癖が抜け

きれんな」

寧ろ、私がママの邪魔にもなりかねないというのに……だが、マ  
ミー人にするのは心配だ。

暁美を同行させるのもよさそうだが、まどかの為に動く故に、い  
つもママと共同戦線を張れるとは限らない。

とはいえ、私が付いて行っても足手まといだ……オブサーバとし  
てはともかく、戦闘者としてはスペックが壊滅的なのがな。

やはり魔法少女にならなければ戦闘では役に立たない……だが、  
まだ魔法少女化のリスクが分からない以上迂闊な事も出来ない。

暁美から話がしたいと連絡は受けたが、暁美はまどかから迂闊に  
離れられないのが厳しい。

ママに協力を仰ぎたいところだが、ママは今でもキュウベえを信  
用している。

ママではキュウベえに対する抑止としては弱すぎる。

どこかにキュウベえを信用していない上に、協力的な魔法少女は  
いないものか……。

「そんな都合よくいるはずもないな……はあ」

「ううね」

マミさんがソウルジェムを翳すと、結界の入り口が出てくる。

「それじゃあ、行ってくるわね鹿目さん」

「はい！ 頑張ってくださいマミさん！」

これから戦いを始めるマミさんを、元気よく応援する。

なんの力もない私にはこれぐらいしかできないけど、少しでもマミさんの心に出してくれるなら、それはとってもうれしい事だと思う。

「すぐに帰ってくるから！」

「はい！ 待っていますマミさん」

そうして、マミさんは結界の向こうに行く。

マミさんが帰ってくるのを待っている間、両手を握りこんで祈る。

マミさんが無事に帰ってきますように、マミさんが怪我をしませんように。

神様がちょっと見てくれるだけでもいいからと、マミさんの無事を祈り続ける。

そうしてじつと祈り続けていると、マミさんが現実へと戻ってきてくれた。

無事に帰ってきてくれたマミさんに、私は

「ただいま鹿目さん」

「おかえりなさい、マミさん！」

出来る限りの笑顔を向けました。

side ????

「まさか君が来るとはね」

「あのマミも手が回らないって話だから来たってのに、全然挺子摺ってなんかないじゃん。ちょっと話し違っんじゃない」

見滝原の魔女が、マミでも倒しきれないほど現れるようになった。

そういう話しを聞いたから来たって言うのに、マミの奴はただの中学生と回る余裕を見せつけていやる。

ムカついたから、クレープを食べてイライラを発散する。

「いやー、まだそこまで増えたわけじゃないんだけど、ここ最近異様に増えてきてるんだよ」

「ふーん。ま、いいや、丁度いい機会だし、ママの奴からすこしぐらい縄張り削り取ってくると思いますか！」

クレープを食べきって立ち上がり、宣戦布告のつもりで空層を町へと向けてやった。

第九章 気が付かれた事実 (後書き)

どうにか安定のさやかを回避しましたw

レポート書いてるときとか、バイトの時とか、そんなときにどうしたら安定を回避できるか考え続け、執筆段階になった時にこんなことが。

自分「くそー、上条さえいなければなー……はっ!？」

その時、赤い人に電流が走る(古谷徹)

自分「そーだよ、上条の腕が動けばいいんだ!」

という発想に至りました。

ついでなので、志保の異常性も晒しちゃえと……うん、サブタイになってるけど、実はついでだったんだ。

これでどうにか安定のさやかは無いはず。

さやか魔法少女としての活躍を楽しみにしていた方々、すいませんがあきらめて下さい。

自分の中に、さやか魔法少女化=安定のさやかと言う公式ができてしまったのでね……。

次は比較的早く上げられるといいなあ……。

第十章 魔法少女の真実 (前書き)

およそ三か月ぶりの更新……遅くなりましたすいません。

他の更新もあるので多少は遅くなったりしますが、今回は遅くなりすぎました……。

オリ展開にスランプ入ると全然進まない……けど、どうにか調子取り戻してきたかなあ……って感じです。

## 第十章 魔法少女の真実

昼休みになり、友人達と集まろうとしたのだが。

「うーん」

何やら、さやかが腕を組みながら難しい顔で考え込んでいた。

その様子を見たまどかと仁美が、私の下へとやってくる。

「ねえ志保ちゃん、さやかちゃんどうしたんだろ？」

「何か難しい悩みのようですけど……」

「ん……何だろうな」

おそらくは私の異常性について悩んでいるのだろうが、わざわざ心配させる必要もないため、知らないふりをする。

「うーん……とりあえず、話しかけてみるね」

「お願いしますわ、まどかさん」

そう言って、まどかはさやかの元へと行く。

「さやかちゃん、何をそんなに考え込んでるの？」

「あ、まどか。えっと……大したことじゃないから気にしないで

いいよ」

まどかの質問に、慌てて手を振りながら大したことじゃないというさやか……それでは、何かあるって言っているような態度だ。

「うーん、それならいいけど……」

「そうそう、気にしない気にしない」

明るく振舞うさやかに、仕方ないなあというようにまどかが溜息を吐く。

さやかが元に戻ったのを見計らい、私と仁美もさやかの元へと向かうのだった。

s i d e さやか

とりあえず一人でどうにかしてみる。

そんな私の意思を受け取ってくれたのか、どうにかまどかが引き下がってくれて助かった。

あのまま聞かれ続けても、まどかには相談できない事だしね。

志保が、志保の命より他人の命の方が大切と思っている、そんなこと言えるわけないじゃない。

私ですら相当のショックを受けてるのに、誰よりも優しいまどかには敵しすぎる。

でも、私一人で改善しようにも、問題の根が深すぎる。

だけど、相談できそうな人があまりいないんだよね……。

志保を知っていて、一緒に考えてくれそうな人は

志保

自覚してないなら自覚して改めさせるべきだけど……志保の事だから自覚していてそうだろうから、私が知っている事を気に病む可能性が高いので無し。

仁美

平和すぎてあてにならない……そもそも、生死に触れてないから、問題を理解できるかどうかも怪しいので無し。

マミさん

生死を賭ける世界の人で、私なんかより断然大人……やっぱりマミさんに相談するべき？

でも、マミさんに余計な心配かけたくないんだけど……あ、なら！

ほむら

おそらくマミさんと同じベテランの魔法少女で、普通の女の子であるまどかが魔法少女にならないように忠告もしたらしい。

それに、何故かまどか以外をあまり見てないみたいだから、あまり負担にはならないよね？

その分、親身になってくれる確率は低めだろうけど、そこは私が補えばよし！

うん、そう思えば、あの表情が今までの豊富な経験を示しているよつで頼りになりそう。

s i d e o u t

横目に見ていたさやかの表情が明るいものとなる。

どうやら、何らかの道筋を得ることができたようだ。

視線の先に暁美がいることから、何らかの相談をしようとしているのだろう。

さやかから見て、私のことで頼りになりそうなのはマミと暁美の二人であり、私との関わりの深さを考えれば、暁美に相談するのが一番だと考えると思われる。

そして、さやかが暁美にその相談をした場合……少し、面倒な事

になるか？

私をまどかの盾として利用しようとするならば、ある程度詳細な情報をくれるだろう。

だが、利用することをためらったり、まどかへ悪影響を及ぼしかねないと思ったのなら、リスクを強く臭わせる情報に留まりかねない。

ならば、さやかが接触する前に暁美に接触する必要があるか……。

幸い、私の歪さに気が付いて悩めるならば、さやかは余程の事が無ければ魔法少女になることは無いだろう。

そして、まどかが魔法少女なろうと思った時に、それを留める事も出来るはず。

頼もしくなったさやかを見て、軽い笑みが自然とこぼれる。

それから、魔法少女についての重要なキーを持つであろう暁美を見る。

いつも通りの無表情でありながら、時折まどかへと視線を送る暁美に苦笑する。

表情や感情は分かり辛いが、まどかを心から心配していることがその行動から理解できる。

「今度こそは上手くやって見せるさ」

まどか、さやか、マミ、暁美。

この手は血に濡れすぎているが、彼女たちを守るためならばそれを振るうことも厭わない。

そして、切り捨ててしまう様な事にはさせない、そう覚悟を新たに決めた。

放課後を迎え、さやかが席を立つのに先んじて暁美の元へと向かう。

「暁美、これからいいか？」

「……ええ、構わないわ」

「あ……」

暁美に声を掛けようとしたさやかは、私と暁美が接触したためにそれを中止する。

私がいる時に、私の事について相談する訳にも行かないからな。

「志保ちゃん、ほむらちゃんと行くの？」

「ああ、まどか。だから、今日はさやかと一緒に行ってくれないか？」

まどかがさやかと行動するように仕向ける。

「え、えつと私は……」

「都合悪いのさやかちゃん？」

まどかが首を傾げ、それを見たさやかが諦めたように溜息を吐く。

「まどか、さやか、また明日」

「うん、志保ちゃん、ほむらちゃん、また明日」

「仕方ないか……はあ……また明日ー」

まどかとさやかに別れの挨拶をし……暁美をじっと見る。

私の意図に気が付いたのか、さやかとまどかもじつと暁美を見る。

まどかが決め手となったのか、暁美が重い口を開く。

「まどか、また明日」

「うん！」

「……どーせこーなるって分かってたわよー!!」

扱いの差に吠えるさやかの後ろに、とある誰かのように虎が見えた気がした。

「…… じいよ」

暁美の案内を受け、私はとある一軒の家に来た。

掛けられた表札には『暁美 ほむら』とだけ記されている。

どうやら、暁美は一人でここに住んでいるようだ。

おそらく何らかの事情があるのだろうが、今聞くべきことではないので黙って暁美に続く。

玄関から廊下を通り、白い部屋に出る。

「適当に座って」

「ああ、そうさせてもらおう」

暁美の言葉に従い椅子に座り、暁美も私の正面へと座る。

「……それで、あなたは何を知りたいの？」

暁美の問いに、少し思考してから答える。

「まずは……キュウベえの正体を知っているか？」

あの白いなまものについて、とりあえず駄目で元々と聞く。

キュウベエの正体を知れば、奴の目的も見えてくる可能性がある。

私の質問に、暁美は少し考えてから口を開く。

「……あいつらの名前はインキュベーター。地球では無いところから来たらしい、異文明の端末のようなものよ」

「異文明……か」

つまり、あれの大本を駆逐するという手段はほぼ不可能ということか。

だがこれだけでは目的は見えない……暁美なら知っているか？

「奴らの目的は？」

「感情というエントロピーを凌駕したエネルギーの回収と、それによる宇宙の延命なんて言っていたわ」

生物というより、世界寄りの価値基準で動いているのか。

そこは前々から感じていたことだからいいとして、感情がエネルギーになるということから嫌な仮説が立つ。

見たところ、魔法少女が希望に属するなら、魔女は絶望に属す。

希望を上にも絶望を下にも、それを前提に水力発電をイメージするの

が分かりやすいだろう。

そう……奴らは、希望が絶望に堕ちる時に発生するエネルギーを回収している可能性がある。

ここで重要なのは変換の方法で無く、希望から絶望へ堕ちるという事……すなわち、魔法少女が魔女化することだ。

「……奴らは、魔法少女が魔女に堕ちる際のエネルギーを手に入れているのだな？」

「おそらくはそう。魔女化……それが魔法少女のデメリットの一つよ」

迂闊に契約しなくて正解だったな……まったく、嫌な予想だけはよく当たる。

「他のリスクはなんだ？」

「魂と体の分離。大体ソウルジェムから100m離れば、肉体はただの死体になるわ」

ふむ、逆を言えば、ソウルジェムさえ無事なら肉体の破損はある程度無視できるのかもしれないな。

他の魔法少女にはデメリットでも、私にとってもはメリットだな。

「では、ソウルジェムの破壊というのは容易く出来るものか？」

「あなた……魔法少女になるつもり？」

これだけ露骨な事を聞けば、さすがに気付かれるか。

「ああ、そうだ……私を止めるか？」

「……いいえ、あなたがリスクを聞いた上でそう思ったのなら止めないわ。むしろ、あなたが魔法少女となることは望ましい」

暁美は戦力が欲しいらしい……そして、魔法少女を戦力として扱うならば、ほぼ魔女相手と考えるのが自然だろう。

「暁美……近いうちに、強大な魔女かそれに準ずる何かがあるな？」

「……理解が早いわね。あなたの予想通り、『ワルプルギスの夜』  
そう呼ばれる災害級の魔女が、約一週間後にこの町へとやってくる」

予想や確信などでなく、すでに確定した事として暁美は一週間後の事を話している。

やはり、彼女は……時を遡っている可能性が高い。

そして、今までの反応から見て、おそらく暁美にとってのイレギ  
ユラーである私を戦力にしたいと言うならば

「未だ君はそれを超えたことが無いのだな。そして、幾度も  
時間を遡りやり直している……違うか？」

「っ!？」

人がどうしようもない事態に当たった時、やり直しを望んでしま  
うのは仕方が無いことだ。

あのセイバーすらそれを望んでしまったのだから、元は普通の少  
女だっただろう。暁美がそう願ってしまった理由が無い。

「……………ええ、そうよ」

「やはりか……………」

暁美がまどか以外を見ない理由も分かった。

失敗を繰り返しているうちに、まどか以外を余分なものとして切  
り捨ててきたのだろう。

そんな暁美がこつも簡単に私へと情報を渡したのは、私が道を切  
り開く鍵となりそうだからか。

おそらく、私という存在で幾つかの状況が好転し、無意識か意識  
的にか私に頼っているのだろう。

いかに覚悟を決めようと、少女には重すぎることだ、誰かを頼っ  
ても不思議ではない。

そうとなれば、少しは暁美の負担を減らさなければ……………年長者と  
してそれくらいはやらねばなるまい。

目の前の暁美を見て、私のように摩耗はさせんと私は微笑んだ。



第十章 魔法少女の真実 (後書き)

スランプの影響か、前半もあれだけど、後半が不自然かもしれない……しかも、急ぎ足かも。

うーん、テンポよくキャラが動いてくれません。

何度一行書いて二行戻ったか……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8225s/>

---

魔法少女 えみやマギカ

2011年10月26日03時05分発行